

532
62

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 5^{6m} 0 1 2 3 4 5

始



26. 7. 21

26

武林無想庵著



世界を

家として

大正
14. 2. 2
内交

東京一人社發行

532-62

世界を家として

武林無想庵著



(1922)

三枚書くと一日の仕事を終へたやうな気がして、すぐ原稿の机から離れて了ふ。尤もその三枚を書くのに、必ず物の六七時間はかゝる。頭の鈍さと筆の遅さには自分ながら愛想がつきる。

讀みたい本は無盡藏だ。知りたいたい知識も無盡藏だ。跋渉したい山河も無盡藏だ。さうして考へたい事書きたい事も同じく無盡藏だ。

——吾生也有涯、而知也無涯、以有涯隨無涯殆已、已而爲知者殆而已矣、爲善無近名爲惡無近刑、緣督以爲經、可以保身、可以全生、可以養親、可以盡年。

莊子の養生主は二十年來のお馴染だが、かうした隠居じみた生活へ這入るたび、きまつていつも思ひ出す。私は相變らず虚無主義者で簡人主義者だと見える。マルクスでも精讀しないと、本當のインタアナショナル・コンミュニストの信者にはなれないものか知らん。

レーニンの肩の手術がうまくゆかなかつたのか、電報には腦溢血を起して危篤だがある。まだ殺すには惜しい人物だ。ポリシエキキの仕事は着々と歩は進めてゆかうが、又ブレスト・リトウスクのやうな大問題が起つた時、レーニンに代る人物がゐてくれないと甚だ心細い。トロツキイでは少々危ない。一日も早く恢復を祈る。

五六年たつたら、是非もう一度外國へ出たい。そうしてなるべくならば、今度はもう日本へなぞ還りたくない。

バルビユツスの「ヌウ・ゾートル」を拾ひよみしてゐるうちに、「彼女等と彼等」といふ小編をよんで、大いに感心した。バルビユツスは二十世紀のフランスが生んだ、甚

だ男性的なヒューマニストだ。今後の文士は皆バルビユツスの開拓しつゝある道を進まなくてはならぬ。

とにかくインタアナショナル・コンミュニズムを離れた思想は、これからはもう全く價值がない。

——六月六日。

バルビユスとロマン・ローランの論争は面白い。マルセル・マルティネの批判も面白い。ロマン・ローランは頭だけの革命家だ。バルビユスは頭だけでは氣がすまぬ革命家だ。ロマン・ローランは到底過去の人たるを免かれぬ。バルビユスにはまだ未來がある。クルランポーはジョーレスの死からはじまつてゐるけれど、ロマン・ローランはジョーレスと共に第二インタアナショナルに屬した思想家だ。恐らくカウツキイ派の一人として生き残るより外にはもう道はなからう。

併し、問題は要するに血を流すか流さぬかの一点に歸着する。血を見るのがいやな人は、どうしても第二インターナショナルで終らなければならぬ。従つて養生主の思想と同じ事になる。

虚無思想はどうしても消極だ。

——六月七日。

ゆうへは恐しい大雨が降つた。夜中だつたが、よほどこはかつたと思えて、文子が人のねてゐるそばへ來た。大雨が降つたつて私のせいぢやないが、又天變地異に對して私が何の力も持たぬ事はわかりきつてゐるのだが、それでもそばへ來てゐると、少しは心丈夫だと見える。女といふものは、どうしても男の保護を受けなければならぬものか知らん？ 或は特に文子がさうなのか知らん？

高橋内閣が總辭職したといふので、新聞は大騒ぎだ。資産階級と特權階級だけの出

來事ばかりに浮身をやつしてゐる新聞が不愉快だ。せめてユーマニテ位の新聞が一つあつてほしいものだがいつになつたら出来る事か。ブルジョアジイと議會主義とを根本的に否定した立場から、ごうかして日本で一つ新聞が發行して見たい。但しそれをやるには、巨万の金と、決死の新聞記者が多數に要る。今のところどちらも得られる筈がない。情ない事だ。

が、まア、穩しく文章を書きながら、徐ろに時期を待つとしよう。但し、そんな大きな事を考へてゐて、文章に對するデグーマンを失つちや仕方がない。バルビユース流にやるサ。さうしてその所謂時期が來ぬうちに死にそうだつたら、せめてさういふ期待の出来る程度まで、世の中を覺醒させて置きたいものだ。

——六月八日。

クロード・アネの書いた『コルニロフ事件』を讀んでいろ／＼な事を考へた。ツアル

の國會を双肩にしたリウオフと、はじめからブルジョアジイと妥協したケレンスキイと、その二人の狡猾さに陥れられたコルニロフ將軍が、國家の爲、國民の爲と念じながら、一新聞記者を頼つて、聯合國の助けを仰ぎ、いかにポリシエキキを排斥しようかとした衷情が、目に見えるやうに書いてある。

今日ではもう露西亞も百万からのポリシエキキ軍隊が存在する。コルニロフ將軍の國家は滅びたが、共產主義の軍隊が生まれたのだ。世界はいよ／＼共產主義と資本主義との争闘場に化してゆきつゝある。

戦争はなくならない。が、今迄の戦争は資本主義同志のそれだったが、これからは全く異つた戦争がはじまつてゆく。十字軍は再び歴史上に現はれて来る事になる。ラツセルがポリシエキキを回教徒に比したのには意味がある。

獨乙と露西亞との提携が確實になつて、獨乙がだん／＼赤化したら、歐羅巴では必ず佛蘭西が孤立する。佛蘭西には七十万から軍隊があるからだ。が、アメリカから借

りた金がいよ／＼英佛で返せない事にきまれば、それを踏倒すにはどうしても赤化しなければならなくなる。

歐羅巴の全赤化！ それは將來必ず来る。さうして追出された歐羅巴人はみんなアメリカへ逃げてゆくだらう。ポリシエキキに追出された露西亞人が各資本國へ今日それ／＼逃げて来てゐるやうに。

南北アメリカは廣い。南北アメリカは當分資本主義の世界として残るだらう。資本主義と共產主義の戦争！ それは恐らく地球の生命と同じだけの長さに續くであらう。

——六月十日。

きのふはウツカリ日記を休んだ。

けふは雨が盛んに降つて、そしてばかに寒い。心持がわるいので仕事も豫定まで出

來ずにやめて了つた。

この頃はよほど緊張味が減退して、とかく書物にはかり親しみたくなる。バルビエツシズムよりはごうもローランデイズムに傾きがちだ。ポリシエキキにもなりたいが、ビエールルイイのやうな耽美者にもなりたい。レーニンに云はせると、人間には進むか退くかの二つの態度しきやないさうだ。中間的態度は恐く退却の中に屬するのださうだ。して見ると我輩もけふは退く方に屬してゐる。併し今日の日本にゐて、牢へでも進んで這入る氣にならないうちは、みんな中間主義だ。即ち依然としてブルジョアジイへ御奉公申上げてゐる事になる。

——六月十一日。

ごうも日毎に緊張味がなくなるやうな氣がしていけない。書く文章がだらけてゆく。下らぬ事ばかり書いてゆくの困る。尤も下らぬ人間が正直に下らぬ事を自白してゐ

る文章だから、下らぬ事ばかり書けるのはあたりまへだが、それにしてもごうも物足りない。

いやに風が吹いて來た。風はいやだ。

猫が天井へ子供を生んだといふ。

寛から二十五日來ると云つてよこす。

——六月十三日。

きのふは辻潤がいつのまにか風流外道庵と改名して、新著の「浮浪漫語」と「自我經」どを持ってやつて來た。ビヤントヴライエだ。例によつて終日取りとめのない話して歸つた。潤は全くボンノムだ。さうして飽まで江戸つ子だ。夢中になつて好きなものに没頭してゆくところは羨ましい位だ。日本なぞに置くには勿體ない。無何有郷、廣莫之野にでも放してやりたい。しきりに南京へ行きたがつてゐたが、秦淮には全く向い

た男だ。支那人に生れなかつたのは奴の不仕合せか。

10

—六月十四日。

暑い。一向氣乗りがせぬ。ねてばかり暮らす。「浮浪漫語」を拾ひ読みする。辻はあれでゐて中々學究的だ。従つて我輩なぞよりや余程確實性がある。たしかにデタラメでない。氣に入つたものに對して正直に降参しきつて了つてゐるところが嬉しい。

—六月十五日。

暑くなつたせいか、午後からはサツパリもう仕事をする氣が出ない。困つたものだ。きのふもけふも一枚半位で筆が動かなくなつて了ふ。これでは豫定の半分も出来ない。あと五十日ほどで百五十枚ほど書かなくちやならぬのだが、こんなこつちやとても駄目だ。明日から理が非でも三枚は必ず書くやうにしよう。

—六月十六日。

どうもいかん。書きたくも何ともない事を書くのだから抄取らぬのも無理はない。あるところへ到達する單なる道筋を書いてゐるからだ。併し興味のない事を書くのは無益だとすると、今書いてゐる文章は全く無益な事になる。尤もこれを書きはじめる動機は單に原稿料がほしいからだつたのだから止むを得ない。併しそれならば尙ほごし／＼書きさうなものだが、ネツカラ精が出ぬところを見ると、それほど金も欲しくないに見える。

要するに根がグワダラにすぎない人間だからだといふ結論になる。文學書を読む事のすきな人間は必ずしも文藝的の文章を書く事がすきだとは云へぬ。

何しろどうもこんなこつちや飯も今にくへなくなる。なごゝシホラシイ事は云ふが本當はやつぱり横着なのかも知れぬ。

マルゲリットの「プロステチユエ」をよみはじめたが、一讀の價値はありさうだ。

——六月十七日。

けふも二枚でしまった。同じ時間でかうも仕事の出来る日と出来ぬ日とがあるかと思ふと、全く不思議なやうだ。

考へて見ると、私は自分の生活を生活してゐないやうだ。文子のいふなり方題になつて、その日その日を送つてゐるのだ。文子は今のところ満足らしいが、一朝、私から世間から悉く見離された場合を想像すると、今の生活が甚だ不徹底な嫌ひがある。但しこんな變な考の浮ぶのも、畢竟、思ふやうに筆が捗らぬからだ。

まア、併し、例によつて、どうにでもなれだ。グウダラな人間の生活だつて、一箇の立派な生活としての價値はあらう。一木一草と同じやうに。生活の價値？ 生活するのに、何でそんなものが要らう。一木一草は考へない。雲も昔から無心だ。

——六月十八日。

けふは厭な天氣だつたが、會話に這入つたせい、例になく四枚書いた。

改造の上村氏が來たが、九月から婦人雑誌を出すさうだ。サボンコフの翻譯、九月號の原稿なんぞ頼んで行つた。

印度革命家のボースとかいふ人が亡命して頭山満氏の世話になつてゐるさうな。頭山満といふ爺さんはよほど面白い。

——六月十九日。

けふはまた逆戻りで一向書けなかつた。

「プロステイチユエ」は中々面白い。自然主義の末流には相違ないが、かうした社會問題はブルジョア治下にはいつでも大聲疾呼するだけの價値はある。ブルジョアジイは残酷だ。これだけの事實を見ても、革命はどうしても必要だ。人間が人間を尊敬しない習慣も久しいものだ。こんな世の中はどうしても××にかぎる。××だ。××だ。

——六月二十日。

「前衛」といふ雑誌で、露國飢饉救済金を募集して来たから、奮發して百圓寄附した。さうしてイヴォンヌ・タケの名前を出した。序でに雑誌「前衛」も購讀する事にした。そんな雑誌か知らないが、社會主義と銘を附してあるだけに頼もしい。

どう考へても我輩は立派な社會主義者だ。アナトル・フランスが共產主義者で通るなら、我輩だつてそれ以上に共產主義者だ。百圓寄附して急に共產主義者がるわけではないが、實際世界が一日も早く共產主義に近づかないうちは、多數の人類は全く不仕合はせだ。飢饉で人の死ぬ位悲惨な事はない。地震や感電の如き天災と飢饉とは同一視すべきものではない。今日の如く交通機關の具はつた世の中で、飢饉で苦しむ民衆を見殺しにしなければならぬ状態は、たゞそれブルジョアジイの弊害からばかり來てゐるのだ。戦争を起して金儲けするのもブルジョアジイだ。飢饉の民を救はずに政争を事とするものはブルジョアジイだ。人間は何と云つても、先づ何よりも食はなけ

ればならぬ。「パンと平和と土地」とはレーニンの根本政策だ。さうしてウォルガ地方は大飢饉だ。レーニンの神經衰弱になるのも無理はない。「働かぬものは食ふな」といふ。併し飢饉はたゞ働いたところで餓死しなければならぬ。食ふ事は働くより先でなければならぬ。「先づ食物を不自由させるな」だ。食へさへすれば人は善良だ。

——六月二十一日。

百圓寄附した事を話すと、果して文子はやかましく云つた。ロシアを救ふ前に、日本にだつて救ふものは澤山あると云つた。又前衛社なんて知りもせぬ雑誌などが信用出來ぬ。きつとマンマと詐偽にかゝつたに相違ないなごも云つた。それに百圓なんてばか／＼しい、五圓か十圓で澤山だ、身分不相應だなごも云つた。一々御道理な話だ。文子のやうな女が多分實際的とても云ふのだらう。「食へさへしたら人間は善良だ」ときのふ云つたが、「人間は飯がくへると慾が深くなる」と訂正しなけりやなら

ぬ事になつた。飢饉で死にかゝつた人間が助かつて、その人間がきつと善良とはかぎらない。却つて以前よりは一層怒が深くなるかも知れぬ。

シニツクに考へると、一切の事は悉く下らない。さうして我利や々亡者になるより外に仕方がなくなる。サンバテイツクに考へると、考へる人間が必ずお目出たくなる。ノベツに詐偽にかゝつてゐる事となる。と氣がつくとシニツクになる。お目出たいのもいやなら、シニツクもいやだ。つまり人間がいやになる事だ。恐らくそれが人間だからなのだらう。併し文子に罵られて、ゲンコー一つ見舞へぬやうな男だ。それからして人間の面よごした。百圓位だまされて取られる事は朝飯前だ。とにかくブルジョアジイの思想といふものはよほど深く人間の心に植ゑつけられてゐるものだ。

——六月二十二日。

むし暑い厭な日だ。隣近所の子供が内のと呼應して泣き叫ぶには閉口する。それが

爲に仕事の半分以上は妨げられる。仕事だけの爲ならどこかもつと静かなところを見つけた方がいゝけれど、爰を今ぬけたら文子の心細がるのは目に見えるやうだ。人間は仕事の爲に生きてゐない。生活する爲に仕事をするのだ。さう思ふと、仕事を半減されても別段食ふには差支なさうだから、爰は動かぬ方が正しいと思ふ。それに静かなところと稱する場所へ行つて見たところで、果して仕事が運ぶかどうか疑問にも思はれる。尤も以前叡山にゐた時とは考が大分異つて來てはゐるけれど……いやに暗くなつた。降りさうでまだ降らぬ状態にある天候は實にいやだ。この天候には十年前から悩まされてゐる。さうしてこの自分の肉體と外氣の氣壓との關係をいつも不思議に思つてゐる。

——六月二十三日。

暑い。サツバリ捗どらぬ。まだあと百枚書かなくちや纏らぬ。要するに、改造社の

言ふどほりになつて、「ビルロニスト」を入れて五百枚で書物にする事が頭にあるのだ。道後で書き出した時はそんなつもりぢやなかつたのだが、山本氏の利用法に乗せられて、さうなつて了つたのだ。まア、併し、今のところ金にさへなつてくれ、ばい。

——六月二十四日。

いよ／＼暑い。「改造」が来たので耽讀しながら、ごし／＼時間を潰して了つた。

末弘博士の「嘘」、福田博士の「レーニン」、二つとも多大の敬意を表して讀んだ。かうした論文を讀んだゞけでも、いかに日本の國情が切迫してゐるかゞよくわかる。政治的に將來はごうでもかうでも共産主義でなければならぬ事がよくわかる。谷崎君の「本牧夜話」あんまり感心が出来なかつた。碧梧桐氏のは讀みかけたがとてもよんではゐられぬのでやめた。自分のものも恐らく人にはさう思はれるだらう。ごういふものだから、文藝欄は本欄と比べると、一段低級な氣がする。甚だ力の弱いものばかり並ぶや

うな心持がする。本欄は一つ残らず讀んだ。大杉氏の「クロバトキン」に對しては、一種異様な感があった。なるほどポリシエキキの亂暴だつたのには驚く。併し「革命」になれば止むを得ないではなからうか。さうして「無政府主義」にはさういふ場合が生ずる氣遣ひはなからうが、それは到底この地上では實現出来る筈はない。ラッセルの文章を見るとそれがよく分る。ラッセルの社會主義觀はアメリカの赤化がミニマムの犠牲ですむやうな考へ方をしてゐる。小ブルジョアの自由主義の立場だから當然だが、それが必ず大資本主義をやめさせる事など決して出来る筈はない。

必ず共産になるにきまれば、何もテロリズムを用ひるには當るまいが、そんな事はどうも空想にすぎないと思ふ。まア、併し尙よく考へて見よう。小泉氏の論戰で、山川氏は忠實な學者ではない事が暴露されてゐる。併し宣傳家としては止むを得ない事だ。マルキシズムの研究と日本の現狀に幸抱が出来ぬ感情とは、さう旨くは兩立しない。學者は學者で勉強してくれ、ばい。革命に反對でない學者だつたら。さうして

宣傳家はもつと勇ましくどしどしと宣傳してもらひたい。

二〇

——六月二十五日。

「前衛」が来た。やっぱり山川氏の雑誌だ。山川氏の文章は明快だ。明快すぎる位明快だ。たしかに「前衛」の名に背かない。急先鋒索超といふ趣きがある。やゝ周到の點に缺けてるやうな氣がするけれど、この際そんな事を云つてゐる場合ではない。拙速でさし支ない。智識階級へ對する宣傳はこれで澤山だ。あとはたゞ組織と實行の問題だけだ。

日本はまだ言論の自由が事實的に許されてゐない。共產主義の政黨など公には決して出来ない。違法結社より外に方法がない。若し普選の行はれる時が來たら、一面さうした結社も出来るが、それまでは悉く克蘭デステンで行かなくちやならぬ。勿論、戦闘方針がだ。かうした調子の新聞一つないのだから情ないものだ。併し三年前に比

べると、さすがに進歩は驚くべきものだ。

——六月二十六日。

非常に鬱陶しくて、けふは全く何も出来なかつた。起きてもねても、とてもどうしていゝかわからぬやうな心持だ。天候のせいだ。

——六月二十七日。

けさ文子が軽い腦貧血を起して一寸騒ぎをやつた。醫者が來たり、足部を暖めたりして、まもなく快くなつたが、暫くすると突然相談があると云ひ出した。何事かときくと、外の事ではない。人間はいつ死ぬか分らない。さうして自分は今迄世の中で何をして來たかと考へて見ると、全く何一つしなかつたやうに思ふ。そこでこれからいつ死んでも心残りのないやうな何事かをやりたいと思ふ。さしづめ子供洋服だが、貧乏

人だつて皆ブルジョアのやうにその子供達に洋服をさせたいだらう。それゆゑ安くて丈夫なキレ地を先づ自分一人で寄附しそれを學校前の貧民の子達へ拵へてやりたいと思ふ。さうして同志を集めて講習會を開き無給でそれを縫ひ、ごし／＼貧民窟と云はれてゐるところへやりたいがどうかといふのだ。無論不賛成のある筈はない。併しさういふ事は賀川豊彦や救世軍のやつてる事と同じだから、それが貧乏の救済といふ意味でなく、我々が現に共産主義の世の中になつたものと假定して、子供洋服のスベシアリストとして、凡ゆるプロレタリアの爲に働くといふ意味であつてほしいと答へた。彼女はそこでその組織上の事について改造社の力を借りたいと云つて、さつそくけふ相談に出かけて行つた。前衛の勧誘に應じて百圓出した事が、大分文子の頭にひゞいたのだと云つてゐた。結構な事だ。梅蘭芳の踊りから子供服へ、子供服から貧乏救済へ、さうしてあとは共産主義を信仰して、その實現の爲に生命を捧げる事だけが残る。モア、ジュ、ヴェレエだ。

けふも鬱陶しい天氣で三枚には足りなかつた。

——六月三十日。

二十八日は「改造」の御馳走を食ひに精養軒へゆき十二時帰宅、爲に日記は休み。二十九日は寛が來たので、そしてけふ歸つたので、丁度三日間仕事を休んだ。

精養軒から、室伏、近江谷、平林、村松の四氏と資生堂へよつたり新橋カフェへよつたりした。新しい人々のノンキで若々しいには微笑を禁じ得なかつた。けふ頼んで置いた「批評」と「種まく人」が來たので読んで見ると、新聞で柴田なんぞの評判してゐるのとは異つて、甚だ不毛の野を實現したものだ。若い人々はまだ殆んど何もしてゐない。又する力もないらしい。センチメンタル・プロレタリアニズムにすぎぬ。併し勞働運動の組織的方面に力を盡さうとしてゐる意氣だけは買つてやらなければなるまい。とにかくこれからは機會がある毎に若い人達に逢ふ必要が大いにある。

「種まく人」の中に、我輩の批評が出てゐたが、少々避易した。今の若い人には文章をよむ力がひどく淺薄なやうな氣がした。同時に我輩の文章の効果がある事を感じて少なからず意を強うした。若い人々は弱い、弱い。何事にかけても弱々しい。我輩の文章位咀嚼出來ないで、人間のわかりつこはない。労働者に非ざる人々の労働運動はこの調子ぢやまだく前途遼遠だ。

まア、あんな批評なら安心して、これから大いに書くべしだ。

—七月二日。

きのふは厭な天氣で仕事ばかりでなく日記も休んだ。けふも何だか妙に考へ込まされて、一枚書かぬうちに、一日は暮れて了つた。「種まく人」や「批評」をよんだせいか、又きのふの讀賣に、前田河廣一郎といふ人のひどく勢のいゝ階級文學論をよんで自分のやうな、ぐうだらな、なまぬるい文章を書いてるのが、しみじみ厭になつたのだ。

だ。

文章なんぞ書く事は全く下らない。喋つたり書いたり讀んだりしたところで何になる？ みんなウンばかりぢやないか？ さうして本當の事なんぞはこの世の中には一つもありはせぬ。スチルネルによると、凡ゆる主義は皆憑かれたものださうだが、どうもそれが本當のやうな氣がする。要するに、どうでもなれた。眼鼻がついたら混沌は死ぬんだ。さうして混沌といふものは全く分らぬものだ。分らずして生まれ、分らずして死ぬ。つまり醉生夢死だ。それでいゝのだ。ばからしい！

—七月三日。

ゆふべどけさまで、大阪朝日へ露國飢民の寄附原稿を書いてやつた。一氣呵成の例の亂暴な文章だが、少々溜飲が下つた。先日所謂、「働くには食はなければならぬ」の意味を落語の枕のやうな調子で書いたものだ。大日本帝國の惡口を書いたので、一

寸溜飲を下げてたわけだ。安價なものだ。前田河氏の階級文學論、甚だ面白い。併し、かうなるともう文學論ぢやない。なくてもいい。いや、ない方がいゝのだ。文藝を超越的な特殊なものとして考へる時代は去つたのだ。文士の夢をさますにはかういふ批評家がごし／＼出て來なければ駄目だ。併しこれだけ勢のいゝ事を書く論客が、果して社會運動の上でどれだけの仕事が出来るか甚だ疑問だ。若い人は勢がいゝ。年をとると共に、ますます剛健になつてゆく事を望む。たゞ所謂大家を罵倒するだけでははじまらぬ。それよりや、大家をみんな改宗させる方法を考へたらどうかと思ふ。文士は元來革命家である方が本性なんだから、「向島へ隱宅をかまへろ」だの、「モンテ・カアロ」へ行けたのといふのは我々文士を見縊りすぎてゐる。併し日本の現文壇では、本當の革命文士なんぞ薬にしたくも見當らないから、それも無理もないか。

けふはまア三枚書いた。

——七月四日。

ゆふべから大雨、終日降りくらす。三枚書いたが、自分の文章の下らなさに、ホトホト愛想がつきた。凡骨は何としても始末がわるい。徒然草の作者は、命長ければ耻多しだから、四十前に死ぬ方がいゝと云つた。全くだ。生きるだけ苦痛だ。併しやつぱりまだ卑怯未練に自殺は出來ぬ。

——七月五日。

けふは例になく四枚半書いた。併しまだあと八十枚、三枚づゝとして二十六日かゝる。今月一杯ではむづかしい。

前田河氏の階級文學論、終りは少々處女の如しだが、大いに参考になつた。向島へ隱宅をかまへてもよさうな老朽文士かも知れないが、日本にゐなけりやならぬ間は、どうせ賣文で飯を食ふのだ。勿論、プロレタリア文學の爲にやるより外に道はありや

しない。但し今迄がブルジョア生活をして来た人間だから、材料はそれより外に持合はさぬ。まさか、主題と材料とを誤解する批評家もあるまいから、それでも差支ない筈だ。

それにしても不思議な文壇の傾向になつたものだ。バルビユツスばかりの影響だけでもあるまいが、とにかく若い人にはよほど頼もしいところはある。たゞ併し熱情だけでは心細い。

——七月六日。

いゝ天氣だ。併し暑い。一昨日あたりから、波の音が恐ろしく高くなつた。轟々と響く。海岸へ行つて見たいやうな氣がする。が、動くのが面倒なので行つては見ない。親潮の解氷の水が押しよせるので、梅雨期が生ずるといふ話だが、暖流と寒流との争闘の結果、あゝいふ凄じい波濤がやつて来るのかも知れぬ。けふは四枚書く。

——七月七日。

けふは四枚に足らずしまひ。それでもまア一日分だ。川上肇博士の「社會問題研究」三十四冊が来た。資本主義ゆきづまりの必然性を論じてゐる。面白い。併し學問をたゞ學問として研究してゐるだけでは、何だか少し物足らぬやうに思ふ。何となく天上の論争をきいてゐるやうな氣もしないではない。博士は科學に憑かれすぎてゐるらしいところがある。

——七月八日。

雨。三枚半。

『中央美術』の寫真板から、「ポポリ」公園へつれてつてくれなかつたと文子が攻撃する。フイレツチエに六七日ゐたやうだつたが、どうしてゆかなかつたかと思つて、考へて見ると、あすこは毎日開いてゐるわけぢやなかつたからだ。滯在中都合よく開いて

る時にゆけなかつたのだ。ビツタイへ出た時、行けばゆかれさうなものなのに惜しい事をしたと思ふ。併しさう云ひ出したら、行つて見たいところは、到るところにまだ澤山あつた。要するに歐羅巴に住まなければ歐羅巴は充分に見られる筈はない。樂な點から云ふと、歸朝した方がよかつたが、歸朝して見ると、歐羅巴を離れた事が残念なやうな氣もする。もう一度ゆくサ。イヴオンヌが學齡期になつたら、どうしても今一度行くサ。さうして歐羅巴へ永住するサ。今から工夫したら、その時には何とかなるだらう……。

——七月九日。

曇り、雨、鬱陶しくていやな天氣だ、かうした氣候は實にたまらぬ。かういふ氣候のない國で住みたいと思ふ。

——七月十日。

文子大腸カタルで資生堂休み。改造社から原稿をまはせと云つて來たので、雑誌へ出たいけを校正して送る。天候宜しからず、氣分わるき事夥し。一枚ほど書きついでやむ。鷗外博士が死んだ。いよゝ時勢の變るしらせだ。

——七月十一日。

髪の毛の伸びたせい、頭が少々變だ。何だか努めて不自然な生活を辛抱してるやうだ。たまらなく不愉快だ。ねて暮らす。

田山花袋氏來る。文子がゐないのですぐかへる。明日また立寄るさうだ。犠牲の生活は下らない。

——七月十三日。

きのふ田山氏来て、文子のフランス料理をほめちぎつてかへる。それで仕事は休み。床屋へ行つたが、頭は依然としてわるい。蓄膿症のせいかも知れぬ。

有島武郎、財産全部を放棄して、文筆労働者となる。今度はそれを敢行した偽善道徳を棄てる必要がある。

——七月十五日。

一昨夜、ヒマシ油をのんで、腸の掃除をしたが、きのふは終日ねてくらした。けふは久しぶりで三枚半ほど書いた。朝の調子だともつと書けさうだったが、やつぱり駄目。花袋氏は今でも四十枚も一日に書く時があるさうだ。同じ人間で不思議なやうな気がする。

谷崎の「愛すればこそ」を読む。それづくに皆面白い戯曲だ。併しほんの手際だけだ。松岡譲の批評にメルヘンだとあつたが、一寸うまい評だ。谷崎は充分磨きをかけた文

章を書く。歌麿派の文章だ。柔かくてたしかな線を立派に引く。名工といつて差支なからう。併し藝術といふものを浮世繪のやうなものの極致だとした場合にかぎる。藝術至上主義の立場に立つたらさうだらうが、我輩にはどうもさう考へられぬ。藝術は人生の全部ぢやない。但し他人の藝術はといふ意味かも知れぬ。

——七月十六日。

蓄膿症の血膿の糟、凄じく左の鼻孔から出る。少し頭が軽くなつたやうに思ふ。三枚半足らず書く。漸く四百枚になつた。五ヶ月半かゝつて四百枚だ。年に千枚はむづかしい。併しもう五十枚書けば一冊書物が出る。さうすれば少しは張合も出るかも知れぬ。

——七月十七日。

また天候のせいか、無暗にねむい。一枚半しきやかけなかつた。

河上肇氏の「社會研究」をはじめから拾ひ讀みしてゐる。マルクス研究は有難いが、大分センチメンタルな分子が多い。讀みながら何となくクスグツたいところが應々ある。併しマルキシズムのいゝ説教者であるには相違ない。山川氏ほどの宣傳熱は乏しいやうだ。

——七月十九日。

きのふは例の山内恒身がやつて來たので、一日潰された。我輩が先生を捉へて、滔々と懸河の辯を振つたと云つて、盛んに文子に馬鹿にされた。「一刻も早く知つてる事を皆ンなぶちまけて了はうとアセツてるやうだつた」。なごご云つて……全くだ。なせあゝも下らぬ事をお調子に乗つて十六七も年下の青年に喋べれたものだと思ふ。けふは三枚書いた。あとまだ五十枚か。

——七月二十日。

暑い。睡の足りなかつたせいか、睡くてけふは又一枚半。「社會問題」に讀み耽る。マルクス研究を河上氏のやうに公開する事に努力しつゝあるのは、非常に有効で、且つ甚だ間接で、官憲を巧に誤魔化しつゝやる社會主義の立派な宣傳だ。「社會研究」といへば、弘文堂からエライ見幕で河上氏へ葉書をやつた事を憤慨して來た。謝罪の手紙を出せなごごいきまいてゐる。ばか〜しい。併し著者へ送本の葉書をやる事がなせ失禮だかわからぬ。河上氏はまさか怒つてゐる筈もあるまいが、あんまり人のやらぬ事なので、本屋奴、面をくらつたものだらう。尤も昔し學生の頃、夏目さんへ葉書を出して、先生に愚痴をこぼされた事があるから、河上氏もいゝ心持はしなかつたかも知れぬ。面倒くさい世の中だ。

——七月二十一日。

改造の上村氏がきのふ来て、七十四枚だけ持つて行つた。やッぱり九月號へ出した
 いのなさうだ。けふも暑い、一點の雲なしといふ上天氣だが、仕事は手につかなかつ
 た。

支那語獨習書やエスペラントなどいたづらして暮らす。語學は面白いが、我輩のは
 どうも實用にならぬ。併し支那の生活は實にいゝ。ラッセルの考はよほど我輩に似て
 る。我輩はやつぱりラッセル流の自由主義的無政府主義者か知らん。マルクス主義
 の信奉者たるべくあまりにブルジョア趣味に浸りすぎて了つたものだらう。併しいざ
 政治運動に参加すると云つたら、勿論プロレタリア運動に加はる事は辭しないつもり
 だが……

もう一度支那へ行きたいものだ。歐羅巴と支那か。さうしてアメリカだ。それに露
 西亞を加へりや全く世界的だ。いくらコスモポリタンでもインタナショナルでも
 それを常住生活するわけにはゆくまい。放浪だ。放浪主義だ。すきな時にすきなとこ

ろへ思ふまゝにとび歩いたら面白からう……併しそれは空想にすぎない。人間には
 とても實現出来る筈はない。ロックフェラーの末子にでも生まれなければ……

七月二十一日と二日とを日を間違へた。さうするときのふはどうして日記を休んだ
 のだらう？

——七月二十三日。

けふも素晴らしく暑い。ゴロゴロして暮らして了つた。たつた一枚半書いたきり。
 書きにくいところでもあるが、どうも夥しく氣が散れるので、まるで原稿に向つては
 わられなくなる。暑いので、そこら中を開放してあるせいかも知れぬ。

——七月二十四日。

けふは曇り。少し涼しかったが、睡の足りないせい、頭が痛い。蓄膿症の精少し

出る。もつと出たら心持がよくなつたらう。三枚漸く書く。

三八

——七月二十五日。

曇り。むし暑い。頭が重い。左眼が血膜炎になつて一層鬱陶しい。よほどノボせてゐと見える。一枚半。

——七月二十六日。

大雨、雷鳴、左眼ますます赤く痛む。それでも三枚書いた。横關氏から來狀。婦人雑誌へ小説を連載したいといふ。金さへもらへたらどこへでも書く。又「現代婦人に與ふる書」といふものを書けといふ。少々荷が重すぎる。但し十枚だといふから書いて見ようかとも思つてゐる。

——七月二十七日。

くもり。血膜炎に辛抱しきれず、松木老を訪づれて洗つてもらふ。毎朝通ふ事になる。醫者へ通ふのは十數年來はじめてだ。それでも三枚足らず書く。

——七月二十九日。

きのふは暑くて凡て休み。けうも碌な仕事をしなかつた。「無想庵無語」第一校正來る。早くあと三十枚ばかり書かぬと追付かれる。

——七月三十一日。

一昨夕から長森夫婦が來る。又昨日は横關室伏の兩氏が來る。けふは睡眠不足で、一日ぶら／＼、丸三日間休業だ。あすからは一奮發しないと駄目だ。

三九

—八月一日。

けふは久しぶりで三枚。校正續々来る。併し何しろ暑いには閉口だ。早く秋になつて、心持よく仕事の捗取る事ばかり願はれる。

—八月二日。

校正ばかり来て、原稿は一向捗取らぬ。暑いうちは駄目だ。

—八月三日。三枚。

—八月五日。

暑い。八十九度。けさイヴオンヌ扁桃腺らしく、小田原へ見てもらひにゆく。一枚半書いてやめる。

—八月六日。

けふは五六枚書きつぶしをやつただけ。九十二度まで上る。汗は終日タラタラと流れる。

—八月九日。

六日の晩に、安藤照子女史一行来る。山本實彦氏も来る。酒宴。七日も終日一行の相手をして暮らす。八日も夕刻まで同様。けふはそれが爲に攪拌された神経が鎮まりさらぬ爲に休業。暑さは連日たへがたい。それだけでも仕事は無理だ。尤も夜やればいゝのだが。上海の橋本氏より返信。プロレタリアがるのはいけないと批評してよこした。當つた批評だと文子は雷同してゐた。

—八月十一日。

四二
きのふは二枚、けふ三枚。一昨夜は尤も夜中に起きて二枚書いた。十七日迄に第一篇の書物にするだけ書く事に約束した。もう十五六枚だ。

—八月十五日。

暑いのと、天候の不穏なのと、不愉快な日ばかり續いたので、仕事も捗らず、日記もつける気がしなかつた。けふは久しぶりで四枚書いたが、豫定まではまだ達しない。

—八月十七日。

約束の口だが、まだ出来ぬ。もう十枚は書かなければ纏りさうもない。紅蓮洞来る。一時間ばかりでかへる。洋服なんぞ着込んで、箱根がへりだといふ。素晴らしい景氣だ。

—八月二十一日。

毎日々々まだ暑い。十八日に電報を受けた。まだ出来上らぬが、一一四枚だけ送つた。きのふからけふへかけて、「現代婦人へ與ふる書」を書いて送つた。けふから、今度は「解放」の注文に應じて「権力否定の研究」のヨタ文を書きはじめる。明日中に書いて、創作を續ける事にきめる。

—八月二十五日。

「解放」へ送つてやる。一昨日から常來る。例の下らぬ問題の相談だ。叱りつけて還す。尤も二晩とまつてけふ歸つたのだ。一昨夕から大嵐となる。けふもまだ直らぬ。それにも拘らずイヴオンヌ東京へ赴く。改造から又電報で今日一杯待つと云つてよこす。

——二月二十六日。(1923)

四四

日記を書いて送る事にする。送り出すと、一時間半ほど睡る。三時四十分、今頃は本線へ乗替へた位だらう。なごと思ふ。夜食のお伺ひに来る。カキ玉と牛なべにする。パンを焼いて食ふ。甘栗か温泉豆を買はうかしらんと思つて、再び外へ出る。一周して何も買はずに歸る。藝者屋や料理屋が澤山ある。酒をやめたので、さういふところへも自然と縁がきれて了つたやうな心持がする。桂座といふ活動小屋まで行つて引返す。金色夜叉の看板が出てゐた。金色夜叉が讀賣新聞へ出てからもう二十四五年にもなるだらう。さう思ふと變な氣がする。その二十四五年間何をしたか？ 何もしなかつたのだ。さうしてもう死が目前へ迫つて來て了つてゐる。さア、死花とでもいふやうなものを咲かすには、どういふ生活へ這入つて行つたらいいものだらう。このまゝでは、まだ何だか死にきれぬやうな氣が盛んにする。

——二月二十七日。

恐ろしい寒さだ。一時間もちツとしてゐると、ブルブルと慄へあがる。後ろの岩組にキラ／＼と氷柱が、いくつも／＼ブラ下る。池の水が堅く凍る。湯から上つて一分とたゝぬ間に手拭が板になる。何といふ寒さだ？ わるいと知りながら、あんまり寒いので、けふは六遍這入つた。

晝飯はおわんにオムレツ、夕食は鱈昆布のお茶わん、おさしみ、野菜の三種。食後上等の蜜柑を食ふ。五つまで食ふ。

原稿は四枚書いた。文明病の方も少し續けて見る。

——二月二十八日。

寒い。風はないが、ヤツぱり昨日の通りの氷柱だ。裏山をどこまでも登つて見る。山へ登ると、すぐ叡山を想ひ出す。どうも山中で閑居静處をきめるのが、一番性に合

つてゐるらしい。

一枚書くと、寒くていやになる。湯に這入つたり、散歩に出たりする。風がないのだから、日當りのいゝところは馬鹿に暖かだ。日の當らぬ、椽の下に氷など張つてゐる、夏向きの座敷に、置いてきぼりをくつて、「爰で書けなけりや、よつぽごごうかしてる、」など、お爲ごかしを云はれてゐるのだ。酒をやめたら、すぐコキユになつて了つた。女に鼻毛をよまれてゐたら、ごうやらキリがよさうだ。その鼻毛さへもう白髪がまじる年齢にまでなつて了つてゐる。

散歩に出た時、懐中じるこを十銭がところ買ふ。また甘栗も三十銭はづむ。

午食はおわんに鳥の歟焼といふのだ。いり鳥見たやうなものだつた。食後、腹ごなしに城山へ登つて見る。中々景色がいゝ。頂上で十銭とられた。道路修築費ださうな。妙な公園もあつたものだ。一時間半ばかり登つたり降りたりしたので、スツカリ草臥れた。歸つて眠る。二時間グツスリ熟睡する。起きると夕飯だ。お伺ひの節ひなかつ

たので、お見斗らひださうな。お茶わんにさしみに野菜、女中も既うちやんと心得てゐる。四杯も大飯を食ふ。野菜のしづくまで甜る。實父のしみつたれ根性が遺傳してゐるのかと思ふと、たまらなくいやな心持がする。これちやア、女房に馬鹿にされるのも無理はないやうだ。

原稿なぞ書くのは張合がない。金錢と虚名とを女房から要求されながら書くのかと思ふと、それだけでもうウンザリする。

——三月一日。

寒いが、きのふよりました。四枚半書く。「文明」の方も二枚書く。

晝、焼鳥におわん。夜、ハシラ金ぶら、野菜、あんかけ豆腐。三十分位づゝ、二三度散歩に出る。

淋しい。併し、女房子と同棲するよりは、死に近い境界だけに、何となく眞面目

だ。女房子を愛するもいゝが、一度は別れなければならぬ事を思ふと、甚だつらい。

——三月六日。

三日の晩、迎へに來られて、この日記に目を通すと、二日の日記がいかんとあつて、破りとられて了つた。淋しさにたへかねて、ひどく焼餅をやき、しきりに疑心暗鬼を生じた文章だ。四日の正午、修善寺を引きあげる。國府津まで來る汽車の中には、さまざまな變つた人物がゐて面白かつた。堺真柄さんではないかなど、文子の云つた、何となく主義者めいた女二人連れ、その一人がしきりに乳呑兒を啼かしてゐた。それから緋網の大盡とでも云ひさうな、偉大な男、娘に相違ない女が、露西亞人のやうな洋裝に着ぶくれてゐたが、御殿場で降りて、長尾峠の自働車越えをする話。相手になつてる男も五十そこ／＼の年輩、しきりに小田原征伐の話など持ち出す。それはいゝが、いゝ年をして、いかになんでも、秀吉と頼朝と戦争したつもりであると

ころが、凄じかつた。尤も、かういふ人達がゐるので、歴史の下らなさを證明する事にもなるか知れない。勿論、御殿場で下車した。その隣りが、川上波蘭公使と大毎記者との一ト組。見てゐると、その露西亞話の受けわたしぶりが、頗る興を催させた。公使も記者も、さすがにアクぬけた、氣のきいた、而も輕薄に失せざる、感じのいゝ態度だつた。

國府津で下車して、鳶屋別荘へ納まる。

二の宮へ一寸かへる。鳩さん母子、兒島才造氏まで來てゐて、ひどく頭が疲れる。八時二十分の汽車で、鳶屋へ歸つてゐる。それが四日だ。きのふはいやな風がふいて、原稿が書けなかつた。夜、女房とよせ鍋をつつき合つて機嫌がなほる。二の宮まで送つて行つて、十一時の汽車で歸つてゐる。けふは大分原稿が書けたが、どうせ碌なものでなし。一時半以上散歩した。

——三月九日。

五〇

けふはもう二の宮へ歸つて三日目になる。一昨日、その前晩、文子が約束どほり、歸つて來なかつたのに憤慨して、ドナリ込みに二の宮へ來て見る。話をきいて見ると、來られなかつたのも無理はなかつたが、結局、いろ／＼相談して、二の宮で部屋でも借りる事にきまる。七日の朝、改造へ出した原稿の返事がけふ蔦屋から廻つて着く。ピロニスト以來のいろ／＼作だなど云つてよこす。自分にはサツパリ面白くないが、あんな事でよければ、とやゝ安心する。

けふもきのふも文明病を一回づゝ書く。

——三月十三日。

東京へ行く。十日の事だ。さのやで足袋を買ひ、十字屋でレコードを買ふつもりで通り越して了ひ、フラ／＼とブスに乗つて雷門へ赴く。公園劇場で澤田正二郎を見る。

序幕だけ見て出る。六區だけウロつき、歸る事にする。焼け跡の區役所、力持の大道藝人、五一郎のやうな男、『俺は國定の忠次』だなど、いろ／＼心持の大道講釋師、どれもこれも、冗談にやつてるんぢやない。食ふ爲に一生懸命なんだ。だから淺草にかざる。銀座まで引きかへす。水島爾保布につかまる。橋戸頑鐵、鴨田九浦、幡恒春、その三人が一緒だ。大坂時代の懇親會のかへりだといふ。茶をのみに這入る。それから十字屋へ赴き、レコードを買入れる。三人に別れて、爾保布氏と根岸へゆき、一泊する。翌日は太郎をつれて電氣館だ。夕食後、雨を冒して二の宮へ歸る。きのふも雨。けふから元梅澤の初見別荘へ通ふやうになる。静かで仕事がよく出来る。但し、けふは「文明」一回書いただけ。

——三月十五日。

きのふは五枚、けふは八枚、大分仕事が出来さうだ。ゆふべ文子と戯れて、三千圓

のダイヤを買へとねだられる。ちんやのおかみは八千圓の指輪がほしくて發憤したとかきく。金色夜叉は三百圓のダイヤで高利貸になつたが、我輩は三千圓のダイヤで何になるだらう？

—三月十六日。

素晴らしい上天氣だ。ところが初見別荘へ來ると、すぐ眠くなつて、十一時まで寝て了ふ。それから「文明」を一回分書く。散歩に出る。海岸を歩く。漁夫が網を修繕したり、美しい白波が打ちよせたり、又野梅が馥郁と満開して、藁屋根の梅澤にひどくウツリがよかつたりする事が、珍しく愉快に感じた。歸つて、まだ名のつかぬ創作を一枚書く。都合五枚だが、けふはこれでやめて置く。

—三月十八日。

きのふは八枚、朝日へ五回送る。

けふは改造の續稿をはじめ。二枚書くのに丸一日かゝる。きのふの割をすれば、一枚二十圓もらふだけの價值がある。

—三月十九日。

雨。寒い。二十枚反古にして、たつた二枚、さうして出來たところは、それほど名文でもない。第一、こんな文章を書いてゐたら、ポビユラリテは到底得られぬ。従つて金にはならぬ。従つて女房には嫌はれる。従つて洋行も出來なくなる。困つたものだ。女房とは三千圓のダイヤを買つてやる約束した。この原稿一枚百圓になる時代が來なくては、とても不可能だ。要するに原稿書いてゐては不可能だといふ事になる。

—三月二十日。

漸く三枚。いよいよ原稿料値上げをしてもらひたくなる。梅澤へは毎日八時間乃至六時間来てゐる。つまり、それが我輩の労働時間だが、労働は生活ではないのだから眞の生活たる旅行と讀書とを、その労働の結果から求めて來なければならぬ。世界の書を讀破し、世界の山河を跋渉する賃金が、その労働から生まれなければならぬ。原稿など書いてゐて、果してそれが出来るか？

——三月二十二日。

きのふは兩方二枚づゝ書く。柴山氏來る。海岸を歩いて歸る。「女性改造」の隨筆を頼みに來たものだ。けふは兩方で三枚しきや書けなかつた。こんな事ではどうもいけない。明日から奮發すべし。

——三月二十三日。

終日苦吟して一行も書けず。止むを得ず、「文明」一枚を書く。それから「女性改造」のもの四枚書いてやめる。

——三月二十四日。

好天氣。八枚書く。隣の墓地の葬式がある。チャン、ボン、ポーンと生垣の外を通る。棺は細引で縛つて、そのまゝ四五人で擔いでゆく。原始的で、いゝ感じがした。池田さんの父上かも知れない。

——三月二十五日。

けふは全部で九枚。「女性改造」のは「選にもれたオス犬の叫び」と題して十枚送る。

——三月二十六日。

五枚足らず、けふは氣分が悪い。

五六

—三月二十八日。

きのふは休む。けふもあんまり暖かすぎるせいか、ねむくばかりなつて、一枚しきや書けなかつた。

—三月二十九日。

けふもねむい。併し六枚書く。

—四月一日。

二十八日から大朝へ出はじめる。三十回ほどで切上げてくれろと手紙が来る。少々張合がぬける。

—四月二十三日。

日記を休んだが、またつけはじめる。連日、一枚若くは半枚しきや書けなかつた。さうしてあまりの平凡さに悲観する日ばかりがつゞいた。「改造」でも既う頼みに來ない。讀者に愛想をつかされた結果に相違ない。併し、生まれつきの頭は、さうやすくと『改造』は出來ぬ。賣れる本が書けるやうになれるものかどうかそれさへわかりかねる。あまり女房がやかましく云つたら、面倒くさい、逃出すばかりだ。

—四月二十四日。

讀みかへすと悲観する。併し續けるより外に方法はない。

—四月二十六日。

毎日、辨當を食ひに來るやうなもの、晝寢をしに來るやうなもの。一行とべかぬ日

五七

がつづく。きのふ、ゴリキイのトルストイ追想記を読んで感慨にたへなかつた。

——六月三十日。(1923)

わざわざ金を出して、買つてまで、それほごまでにして、かうした私の書く文章を愛讀して下さる人の数が、今日の日本語を読む人々の間から、果してこの雑誌の立ちゆく程度にだけ求め得られるものかどうか、それは進んでこの雑誌を経営する氣になられた堀岡君にも、また直ちにその勧誘に應じて、これから毎日、もうこれで相當にいくばくもなくなつてゐるところの甚だ貴重な私の餘命のうちをば、それが爲に日課として何時間かづつ、快く犠牲に供しようかと決心しつゝある私自身にも、それは全くわからない。わからう筈もない。またわからなくて宣しい。

人生は冒険だ。かうやつて生きてゐるといふ事自身が、それ自身既に冒険なのだ。その冒険の上に立つ一切事だ。いつ死んでもいゝ覺悟でなくては、人間は一刻も生きてはゐられない。従つてあらかじめ、ハッキリさうした覺悟なしには、我々は人生の何事をも企てられない。だから、わからなくて宣しい。

——繩鋸木斷、水滴石穿、學道者頂加力索。水到渠成、瓜熟蒂落、得道者一任天機。この部屋の床の間に、さういふ文字の書かれたカケモノが、いかにも小紳士の別荘然として、月並にもブラさがる。

菜根譚だか何だつたか、なんでもそんなやうな利いた風の本をば、いつばし悟りめかして濫讀してゐた時分、さうした十數年、いや、二十何年以前、たしかどこかでたつた一度位はお目にかゝつた覚えのありさうな文句だ。キザな文句だ。人事をつくして天命をまつといふほどの常識を、道學で鍍金して、變に俗ッぽく、持つてまはつた文句だ。

が、わる口はいふものゝ、このカケモノと起居を共にするの、もうあと百日ばかりかと思ふと、さすがに名残も惜しまれる。

——七月一日。

少しも氣が落ちつかず、本の整理をしたり、あつちの本を一行讀み、こつちの本を半頁讀み、と、晝寢をしたり、起されて、頭が重く、大きな聲をして、妻子に當りちらし、徒らにイラ／＼しつゝ暮らす。天候と同じだ。晴れたり、曇つたり、驟雨が來たり、突風が吹いたり、一分たゝぬうちに變る。

——七月二日。

けうも無爲にして暮らす。あちこちと相變らず古本をアサる。ユイズマンのマルト、フロオベルのレデユカシオン・サンチマンタール、ジュール・ルナルのエコルニフラール、ジヨルジ・デュアメルの子ヴィリザシオン、ジャン・ジョーレスのイストアル・ソシアリスト、紅樓夢、牡丹亭還魂記、曰く何、曰く何、要するに手當り次第だ。勿論、何日もかゝつて全部讀了したのもあり、又時に思ひ出したやうに、いゝ加減のところ

を、いゝ加減にチヨイ／＼拾ひ読みしつゝあるのもあり、又これからミツシリ研究的にやり出さうかと思ふのもあり、又もう一度読み返して見ようとして、そのまゝにして丁ふのもある。

文章を書くのは、こんな日記ですら、書きはじめるのが中々億劫でたまらぬものだが、読書はどんなむづかしいものでも知らず識らずとツついて了ふ。それも併し合縁氣縁ではあるけれど……

X

ユイズマンのマルトで、ふとエドモンド・ゴンクールのラ・ファイユ・エリザ、グイクトル・マルゲリットのプロスチチュエ、そんなものをしきりに思ひ出した。プロスチチュエが一番長篇だが、それ／＼に皆ごとく似通つたところがあるやうな気がした。さうしてゴンクールのが一番古いから、あとの二人はその影響を必ずしも受けなかつたとは云へないかも知れぬ。

X

レデユカシヨン、サンチマンタールでも、そのうちからドオデエのサフォオなどを探し出す事が出来た。無論、應用の才人であるところのドオデエの方が影響を受けたに相違ない。それは創作の年代を調べればすぐ分る話だが、さうでなくて、筆致の上から考へて見たゞけでもよく分る。

X

『藝術の爲の藝術』の時代はすぎた。『白刃を啜へて』の時代が来た。が、それだからと云つて、バルビユッスの文學が必ずしもフローベルのそれに一步を進めてゐるといふ次第ではないのだ。読者はそのいづれからでも自分の營養を攝取する事が出来たらそれでいゝ。たゞ米の飯を食ひつけたものは、パンばかりでも辛抱がしきれないやうな場合はある。文藝の作品は食物と同じわけのものだ。食通と稱する批評家の言葉に感心する前に、読者はとにかく手當り次第どんな本でも讀んで、そのうちから無意識

に營養を吸収して了ふ方が急務だ。

六四

無政府共產主義は天國を地上に下さうとする思想だ。實は凡ての宗教と共通した基調を有してゐる。カイザルのものをカイザルに返さうとしたのはキリストだが、カイザルのものを事實的に横取したのはブルジョアだ。さうしてそのブルジョアが永遠に獨占しようとしつゝあるそのものをば、とりあへず奪ひとつて了つたのが、ロシアのボリシエビズムだ。現實のこの世の中では暴力なしには何物も所有が出来ないからだ。私は命が惜しいから、なるべく暴力から遠去かつて生きたい。一生人間の腰抜けとなつて、何物も所有さへしなければ、さうして生きる事も出来ないではなさうに思へる。エライ人になるばかりが能でもあるまい。クレムリといふ建築物があるかぎり、そこへ這入る人はいつだつて一人しきやゐない。プロレタリア第一世陛下だなんて、蛆虫のやうなブルジョア共がホザくのも、まんざら理由のない事でもない。レニ

ンは併し名君だ。それだけでも、各國極右黨の羨望の的となる。後藤さんがヨツフェを招んだのは、英雄、英雄を知る、なんだらう。たゞ使君と我とのみ、ヨツフェは折からの大雷雨で杯を落したかどうか知らぬ。後藤さんは一寸矛を横たへて詩でも賦しさうな格好だ。エライ人は、どうも、凡人とはどこか違ふ。さうして凡人はいつも閑だから、こんな事ばかりシャベツてゐる。貧乏ヒマありだ、とは紅蓮洞の言葉、その通りだ。

半歳病氣して、原稿かせぎが思ふやうに出来ず、頭は枯渴する、借債は殖える、女房には攻撃される、これではならぬと思つて、漸く二ヶ月もかゝつて書いた三十七枚の原稿を携へて、五百圓前借りに改造社へ出かけたのが四月の末日。見事に拒絶されて、思ひ立つた上海行、印度行、埃及行の腰を折られ、泣く／＼日に一行位づゝ書いた原稿が二十枚ほどたまつた頃、山本氏から手紙で五百圓位なら拵へてやらうとい

六五

ふ。いそ／＼上京したのが五月末日。女房と水島爾保布氏と三人して山本氏の御馳走になつた上、翌日、一百五十圓もらつて、いざ出かけようとする、上海の橋本君から電報で、秋までのばしたらどうか、といふ勸告、それは本當に好意からで、原稿を書くの、わざ／＼暑い／＼上海でもあるまいと察しての話だ。早速承諾の返事を出す。さうかうしてゐるうちに、今度はまだ借金も出来もしないうちから、氣の早い女房が十月二十五日出帆の榛名丸のキャビンを一つ申込んで来て了ふ。親子三人でいきなり巴里へ出かけようといふのだ。勿論、賛成だ。借金も大抵は出来る事になつてゐる。要するに女房に甲斐性なしと思はれるのが苦しさに、單身南清、カルカッタ、ダージラン、ベナレス、カイロ、アレキサンドリアなど、放浪して、その奇抜である事になつてゐる紀行を書いて、読者をアツと云はせ、書肆にも喜ばれ、女房にも見上げられようと企てた次第だつたのだが、それには及ばぬから、それまでジツとしてゐて自分と一緒にすぐ巴里へ行け、といふ事になつて見ると、その方がどうも楽しい。

低きにつくのは水の持前だ。困苦缺乏にはなるべく堪へたくない。いよく女房に愛想をつかさねぬうちは、おとなしく御意に従つてゐた方が自然だと思ふ。そこでそれが爲には世間位に笑はれやうと嘲けられやうといくらでも辛抱しようと思ふ。と、上海行をやめた爲か、六月の末日にあと金二三百圓重版の印税をくれると云つたのが、何のたよりもないうちに、六月もすんで了ひ、けふはもう七月の二日だ。かういふ風に、いろんな事を思ひ出したり、邪推したり、僻んだり、いろ／＼頭を使つてばかりゐるので、肝腎の書きつゝある原稿の捗が一向にゆかぬ。五十二枚まで書きかゝつて、その後もう一週間以上になるが、どうも、一行も、一句も、まだ跡がつかずにある。イヴォンヌが又風をひく。さう／＼、上海行を見合はした原因の一つとしてイヴォンヌの氣管支カタルがまだあつたつけ。二週間ほどしてそれはなほつたが、また風だ。子供の病氣が一番神経に觸つて、何も手につかなくなる。

x

下らぬ事ばかりけふはダラ／＼と書いたものだ。が、これが私の本領だ。このダラ／＼と書きつゝある間が、私には一番氣の樂な時だ。氣樂な時が人生では一番尊い。

——七月三日。

雨。

「歸朝紀念」とでも題さうかと思つてゐるところの日課原稿をば、けふは久しぶりで豫定の四枚だけ書きあげる。

x

毎日四枚づゝ書いて、それが一枚六圓以上づゝに賣れゝば、月に七百圓づゝ収入がある勘定となる。毎月七百圓あつたら、親子三人が、ごこの國へ住んでも暮らせるだらう。それゆゑ、どんな事があつても、毎日四枚づゝはきつと書かうと思ひ立つてから、もう百日にもなるが、けふがやつと五十八枚目までだから、百分の五十六、一日

にザツと五分三枚弱しきや書けてゐない。そんなこつちや外國は愚か、この二の宮に蟄居しつゞける事さへ、むづかしい。女房のやかましく云ふのは無理もない。

x

どうしてかう怠けるのかと思ふ。いや、怠けるんぢやない。頭がカラツボだから、書く事がない爲、それで閑へて了ふのだと思ふ。いや、あんまり藝術的良心が強すぎて、一字一句いやしくもしなすぎる爲だと思ふ。いや、それは了見がケチくさいから、一文惜しみの百失ひと云つたやうな、あんまりに末節にのみ拘泥しすぎた藝術的良心に捉はれてゐる爲だと思ふ。いや、雕蟲の末技に没頭してこそ、はじめて藝術なんだと思ふ。いや、俺は自分の追憶ばかり書いてゐて藝術なんぞ頭に置いてはゐないのだと思ふ。とにかく、たゞ徒らにかう、一つの命題が出ると、いろ／＼に思ひまはすだけの話なのだ。さうして事實は事實だけの上で、委細かまはず、夜となり、晝となり、雨が降り、風が吹いて、ズン／＼日がたつてゆく。

x
宮島資夫君の「假想者の戀」といふのが朝日夕刊へ出はじめたので、楽しみにして讀む。大谷内越山の「美少年録」と、その二つが、この頃の夕刊をば、私をしていつになく新聞なんぞを待ちかねさせる。

x
「假想者の戀」は辻潤君を主人公にして、宮島君がスツカリ辻君その人に没頭しきつて、例の叡山生活が、實によく描かれてゐる。私も武田だなど、いふ假名で首を出してゐる。

x
美少年録は私がまだ十位の頃、當時私の家の營業養子であつたところの、九段の鈴木真一の弟子なる今井直といふ人が、毎晩私に話してきかしてくれた話だ。その頃はそれが馬琴の傑作だか何だか一向知る筈もなかつたが、面白くてくたまらなかつた

記憶がまだありくゝと残つてゐる。さういふ意味で越山の講談が面白く待たれる。

x
通俗小説と講談、それが面白くなければ、新聞は決して賣れない。巴里でも共産黨のユーマニテは却つて労働者には喜ばれず、マタンや何かのブルジョア新聞が、その活動寫真小説が載つてゐる爲に、どうしても多く労働者に喜ばれる。村山龍平一家に搾取されるのだとは知りながら、つひ面白い講談だと釣られて讀む。人間の弱點に乗じて、たゞそのみのみに築きあげられた資本主義社會なんだから、仕方がない。

x
併し榮枯盛衰は世のならひだ。驕る平氏はきつと久しくない。天下はいづれまはり持ちとなる。社會主義者も絶望するには當るまい。要するにたゞ時の問題だ。

—七月四日。

あんまり好天気であるせい、何んもなく気が落ちつかず、それでゐて散歩もせず、ブラ／＼と暮らす。何遍も机へ向ふのだが、どうも取りかゝれずじまひとなる。そのくせ破りすてた紙は二十枚近く上つたらう。

x

私は二十年一日の如く、殆ど毎日、原稿を書きたい／＼と念じながら、あまりに神経が病的に働きすぎる爲と、あまりに誇大妄想的の名文が書きたい爲とで、却つて何一つ書けずじまひとなつて、今日に及んだわけだ。本當を云ふと、私ぐらゐ文藝のすきな人間も珍しいのだが、それをわざと皮肉に侮蔑したやうな顔して、創作能力のない事をゴマかして来たものとも考へられる。さう考へると、私ぐらゐ卑屈な人間はない事になる。が、枕の草紙の作者や、つれ／＼草の作者などが、若し一人前の文士だと云へるなら、こんな随筆ばかり書いてゐても、それで立派な文士として通用しない筈はないとも、考へなほせば、又さうも考へられるから、強ひて自分を卑屈呼ば／＼

しないでもいゝわけか。

x

氣に入つた文章を書かうとして、何枚も何枚も惜しげもなく原稿紙を費し、さうしてウン／＼苦しんで暮らす生活は、自分としては何等の收穫がなくとも、大して心によましいとは思はれない。たゞ併しそんな事してゐては、原稿料をかせぐ方がつひ／＼オロソカになるので、それがいけないと思ふ。と、そこで非常に不愉快となる。

x

小説めいた書き方をすれば、原稿料一枚六圓くれる。たゞの随筆めいた書き方をすれば、四圓しきやくれない。それが改造社での事だ。私は自分の書く文章に、これは随筆だから、これは小説だから、と、さういふ頭の使ひわけをしながら、決して骨の折り方に區別をつけた覚えは毛頭ないのだが、一枚について二圓もちがつて見ると、勢ひ雑誌の編輯者から見ても、なるべく小説らしい文章の方がかり、つひ書かう／＼と

傾きがちになる。それほど金が一方ではほしいのだ。

七四

南岳思禪師は乞食の群に這入つて法華經ばかり研究し、隨自意三昧を著したばかりに、智者大師がそれから三止三觀をとつて、摩訶止觀といふ大機縁が熟する事になつたものだといふ。くれる錢なら、乞食のやうに、ごしごし遠慮なくもらふがいが、錢をほしがつては、私といふ人間は、やツぱり面白くない生活を送らなければならなくなるやうだ。それが爲に妻子が私から離れるなら離れるが、事にしよう。さうして斷じて錢なんぞほしがらぬ事にしよう。

x

—あなたのところへは友達といふものが、まるで來ないわねえ。と、妻がいふ。

—世の中から見棄てられた證據サ。と、私はいかにも毒々しく答へる。

—あなたのやうな人は一生僻み根性から離れて物が考へられないのだから氣の毒なものね。

—さうサ。手前^{テマエ}にまでその通り輕蔑される位甲斐性なしだから僻むより外に生きてゐやうがないのだ。

こんな問答をしながら、私はどうかしていゝ原稿が書きたい〜と念じて、自分から座敷牢をこしらへて、その中へ這入つて暮らしてゐるわけだ。そのいゝ原稿とは何んだ？ 金になる原稿の事か？ 後世に残る原稿の事か？ 但しはこんな原稿の事か？……………

—七月五日。

苦吟まる二日、十六行あがる。

五日一石を書き、十日一水をどうとかするといふ、こゝもと杜詩の心意氣だ。同時

七五

に、この世智辛い世の中、の原稿書きとなつて、いさゝか、「もゝしきの大宮人はいとまあれや、」の感がないでもなさうだ。けうも雨、ツユだから不思議はない。

——七月六日。

上海の橋本氏からの手紙、

「其後御無沙汰致しました。御變りありませんか。

御計畫を打壊してお氣の毒に存じます。併し實際此暑さに當地に來られなくてよかつたと思つて居ります。當地に慣れきつた小生等でもつくづくいやになります。まだ夕方テニスをする事が出來ますので、僅かに暑さを忘れる事が出來ますけれど、此様な時此様な土地で原稿書きなど到底出來ませんでせう。それで却つていゝ事をお勧めしたと思つてをります。

改造の御創作まだ拜見致しませんけれど、是非讀みたいと思つて居ります。此頃の暑さの爲めに頭も鈍つて大して煩悶もしない日を送つてをります。ほんとに日を消して居るにすぎません。

涼しくなつたらこちらから御招待致します。其時は落付いて御勉強の出來る家も探して置きます。何しろ普通の人とちがひますから、其點でも私としては不相應な位心配してゐるのですよ……」云々。

かういふ友達のある間は、この世はまだ私にはそれほど住みにくゝもないわけだ。併しその好意を無視して、上海行は見合せとなつたんだから、因縁とは妙なものだ。巴里には果してこれだけ好意をもつてくれる友達があるかどうかわからないのに……

x

どういふものだか氣が乗らず、けふも終日何事もせず、ブラリ／＼。途方にくれて床屋へゆく。床屋の神さん三面六臂の働きをしてゐたが、それを見て、しみ／＼自分

の無能を嗟嘆する。お祭りだと見えて、若い者大勢、お神輿をかついで通る。天下は泰平だ。貧乏人は貧乏し、金持は金を儲け、賢人は大臣になり、愚者は社會の下積になる。それ／＼天命を楽しんでゐるわけだ。だから天下は泰平だといふのだ。泰平でありやア、それで天下はいゝものなんだ。

x

ムシヤクシヤするので、又手當り方題の讀書をする事にきめる。

——七月七日

一寸した加減で、子供を乳母車へ乗せ、國府新宿の海岸へゆく。一時間ばかり彼女を砂の上で遊ばせて歸る。この一年間に、かうして子供と二人きりで外へ出た事は、前後に二度しきやない。さうしてその一度も、つひこの頃だ。

——フランスへ一緒に行く事になつたら、現金に可愛がり出したと見えて、時々

外へつれてゆく、と云つて笑つてた。と妻がいふ。

——誰が？

——みんなが……

——フン、今迄は可愛がらなかつたものと見える。

——今迄は虐待してたんださうだ。

——フン、虐待か……

國府新宿までは半道足らずあるので、往復乳母車を押すと、汗びツしよりとなる。二時間ばかりグツスリ睡る。

が、どうも頭が散漫で、どうしても筆をとる氣にならない。

x

自分の頭は自分のものに相違ないやうだが、これでやツぱり自分の思ふやうに働かすわけにはゆかないから面白い。私といふものゝこの世に處してゆく上について、そ

の方が利益だと思ふにも拘らず、さういふ風に働いてくれないところを見ると、私の頭の生存と私自身の生活とは、何だかそのお互ひの利害を異にしてゐるやうな心持もする。

x

ヨツフェが自分のからだは晴雨計のやうだと云つたさうだが、私も同感だ、天候ばかりでなく、周囲の人聲や音響によつて、一瞬間ごとの気分をば一々左右される。こんなデリケートの頭だから、容易に仕事の捗がゆかぬのも無理はない。

x

文士はどうも私の柄にないやうに思ふ。私には圖書館の書庫係にでもなつてゐるのが一番適任のやうに思ふ。今度の巴里行で楽しみなのはビブリオテーク・ナショナルの研究だ。この前にはそこまで頭を向ける機会がなかつたが、今度こそはと希望してゐる。但しすべてが女房と子供とを中心にする生活なんだから、果して私一人だけにか

ぎつた、彼等の毎日には何等の関係もない、ノンキきはまる圖書館研究なんて事が行はれるかどうか、頗る疑問に屬する。

x

小學校の頃は甚だ病身だったので、よく學校を休んだが、寢床の頭の前に、昔船頭だつたといふ養父の又その養父が残したライブラリーがあつたので、その中の低級な軍記物や長脇差物をば、十歳に足らぬ頃から、皆讀んで了ひ、それから病みつきとなつた雜書の濫讀だ。十歳前後は義經再興記、三國誌、武王軍談、吳越軍談、漢楚軍談、輿地志略、さうした殺伐なものに没頭して、成吉思汗と諸葛武侯が、その頃の理想的人物だつた。殊に三國誌と義經再興記とは甚しく愛讀したものらしい。だから軍人になるのが一番よかつたのかも知れぬ。さうしたら恐らく日露戦争できつと名譽の戦死といふものを遂げてゐて、甚だ世話のない一生としてすぎ去つて了つたであらう。

x

小學校の頃の事を思ふと、臆病なくせに、一番軍ごつこがすきだつた。さうして孫呉の兵法とかいふもので、その馳引に肝膽を碎き、自ら孔明になつたり、耶律楚材になつたりして、いつも百戦百勝だつたものだ。そんな事を考へると、なせ早く滿蒙へでもとび出し、馬賊の一軍を編制する氣にならなかつたものかと、今日となつて見ると、そればツかりが甚だ残念でたまらなく思ふ。何だか張作霖なソにしてやられたやうな氣がしきりにする。

x

が、今はもう小學校の生徒ぢやない。さうして柄にもない文章書きとなつて、そのアヤフヤな原稿料で、大膽にも再び外國へ押し出し、妻子まで養はうと企てゝゐるのだ。自分ながら無法な男だと思ふ。辻潤は私の事を何かの中で無法庵と名づけてゐたが、全くそれに相違ない。

x

隨筆書きか……これだけで誰か年に一萬圓づゝも出してくれるやうだと、全く極樂淨土のやうな世の中なんだけれど……

——七月八日。

頭の具合が甚だ悪い。天候のせいだ。

x

鏡にうつる自分の頭の恰好やからだの肉の出来具合を見ると、どうも一体に畸形のやうに思はれる。ひよつとすると、生まれながらの狂人なのかも知れない。十日に寛が来るさうだ。

x

金が借られさうだ。出来たら、いよく十月二十五日出帆の榛名丸乗船が確實となる。

いやな雨が降る、降る……

x

——七月九日。

有島武郎氏情死する。變な氣がしたゞけだ。松井須磨子が死んだほど感じないと妻が云ふ。榮耀の餅の皮といふ事がある。死に方まで私には羨ましい。乃木大將、伊藤公、星亨、安田善次郎、原敬、それから有島武郎さんか。それ／＼主義に殉じた人々だ。何となく國寶にしてもよさ／＼うな情死だ。恐らくその比翼塚は鳥邊山のお俊傳兵衛以上の參詣が引きもきらぬであらう。

x

私は併し死んだ御兩人はそれでいゝとして、一番人間らしい苦痛にたへなければならぬ筈の、姦通を許して、離婚までも申出た夫なる人の心持に共鳴する。

——七月十日。

「アナトール・フランスは露國革命黨員にはたえず興味をもつてゐた。

ある日、ギユスターヴ・エルヴエが、彼れのところへ、三十恰好の、蒼白い、罪人のやうに一分刈にした、憔悴せるその顔の上へ謎のやうな表情を湛へた、一名の男を引張つて來た。

「ラ・ゲール・ソシアル」の社長は、

——ポーリス・サギンコフ、暗殺者。と云つて、その男を紹介した。

——ようこそ。と、この未知の男に手を伸べたベルジュレエ氏（アナトール・フランスの本姓）が云つた。

——さういふ肩書をつけた名刺を百枚ばかり、私はエルヴエさんに印刷して頂かうと思つてゐます。と、サギンコフは冗談を云つた。

——で、誰を暗殺したんですか？ と、フランスが訊いた。

——内務大臣ブレーヴ、それから大公爵セルジ。と、エルヴェが答へた。

——大きな獲物で。と、ベルジュレエ氏はうなづいた……

その後、サギンコーフはケレンスキイ政府の下で軍務大臣となつた。彼はボルシエ并ズムに對して無益に反對すべく試みた。彼は露國を去るべきであつた。歐羅巴を横斷して、彼はレーニンやトロツキイに對して反對黨を結束すべくたえず努力してゐる。

この昔のテロリストはそれ以來反革命者の折紙がついた。これは彼れの運命の最も逆説的でないところの轉機ではないのだ……」

ボオ・グセルのヴィラ・サイド記に、かういふ挿話がノートとして添附されてあつた。

「まだ無かつた事」の著者ボーリス・サギンコーフとは正に間違ひもなくその人の事だ。

x

千九百〇五年の露國第一革命がいかに失敗したかといふ道筋が、この小説を読むと、何となく窺はれるやうな心持がする。さうして同時に水滸傳の後半を読むやうな一種悲壯の感に打たれる。二三年前、加藤一夫君が一度この小説を譯しかけた事があつたと、辻潤氏は云つてゐたが、さもありなんと思ふ。

x

一昨年の正月だつたと記憶する。巴里のアヴニユ・マクマホンをテルヌの町の方へダラダラと下つてゆく途中、ふといつも見る本屋の店頭に、偶然この佛譯が出でゐた。Ce qui ne fut pas……早速買つて歸ると、徹夜しても讀みつゞけなければならなくなつたほど、それほど私には面白かつた。それは少時三國誌や水滸傳に耽讀した以來の、また大學生の頃、「戦争と平和」の英譯を貪るやうに讀んだ以來の、さうした意味と同じやうな面白さであつた。

—七月十一日。

「悪の華」の八十三頁を偶然ひらく。L'HEAUTONTIMORUMÉNES とらふむかひかしい文字の題がついた詩が現れる。字書を引いて見る。

「ヘオトンタイモルメノス、(或は、自ら罰する人) テランスの喜劇、慈仁と人類愛に溢れたる哲學の、愛すべき著作。

Homo sum ; humani nihie a me alienum puto — 我は人也。人類愛に觸るゝものゝ一切は我にありてはよそ事ならず。

有名なるこの詩句の發見せらるゝはこの喜劇である。』

そこでテランズといふ詩人はと云ふと、紀元前百九十四年から百五十九年まで生きた、カルタージュ生まれの羅典詩人ださうな。希臘劇の模倣家で、アドリエンヌ、エシール、アデルフなどゝいふ作品が残つてゐるさうな。

—七月十二日。

ポオドレールの本文にはこんな句がある。

Je suis la plaie et le couteau !

Je suis le soufflet et la joue !

Je suis les membres et la soue,

Et la victime et le bourreau !

Je suis de mou coeur le vampire,

—Un de ces grands abandonnés

Au rire eternal condamnés,

Et qui ne peuvent plus sourire !

（われは剣にして且つ刀なり！

われは頬打にして且つ頬なり！

われは四肢にして且つ刑車なり、

犠牲者にして且つ行刑者なり！

われはわが心臓の吸血鬼なり、

——かの偉大なる自棄者の一人

永遠なる笑ひにまで罰せられたる者の

またもはや微笑し能はざる者の！）

甚だ我意を得た句だと思ふ。

——七月十三日。

ポオドレールも好きだ。ボーリス・サギンコフも好きだ。さうしてレーニンやトロツキイに對して、勿論敵意を持たぬばかりではなく、多大の同感と共鳴とを禁じ能はぬものゝうちの、私は立派に一人だ。

——七月十四日。

君は共産主義者か？ と、若しきかれたら、私は遲疑するところなく、

——さうだ。と答へる。

——それではなせ主義者の運動に身を投じて、死を塔してまで政府者と争はないのか？ と、つゞいて訊かれたら、

——自分の好きな讀書と作文と、それから妻子を愛撫するこの日常生活を放擲してまで、さうした命懸けの政治運動にとび込むほどの感激が、性來イゴイスチックな、頑な、私のこの頭の中からは、どうしてもまだ湧いては來ないからだ。と答へる。

それは私の今迄の教養が何から何まで悉くブルジョア仕込みだからに外ならぬ。さうしてこれから先きも尙一層ヘヴィをかけて勉強したいと思つてる事が、やッぱりすべてブルジョアジイの築き上げつゝあるところのそれに相違ないのだから、私の共産主義は、その實、甚だ内容の怪しいものになる。

x

けれども、あれほど残忍刻薄の迫害を敢てした後、それが國教となつて、とう／＼、まるでキリスト自身の思想とは、全く似ても似つかぬやうな、今日の歐羅巴文明を造る、その素地を開いた羅馬帝國の事を思ふと、共産主義でなくては、結局夜も日もあけぬといふやうな、今日では逆も想像のつかぬ、併し決してそれは在來のユートピアや極樂淨土でない、一種異様な一時代が、現代のこの世の中に、或は自然と引繼ぐやうな破目に陥つて行かぬものとも限らぬ。

——七月十五日。

——*Eppur si muove.* (とは云へ、それは動く。)

これは有名なガリレオの言葉だ。

——七月十六日。

——年とる事は嬉しくない。が、面白いものだ。

——彼女と共に年とる爲に一人の女を有する者は幸福だ。

——人は……人は……全く一人ぼつちで生きるやうに……さういふ風に慣れ得る……
……得ものかしらん？

——御覽のとほり。

——君は君の生存をば甚だ満足してゐるやうには見えないが？

——(溜息をつきながら)満足？ 僕が死に得る日、僕は満足するだらうよ。

これはみんな「死の舞踏」の中にあるストリントベルヒの言葉だ。

九四

——七月十七日。

——肉體からすると、女は男よりは正直だ。が、精神からすると、彼女はウソをつく。さうして彼女がウソをつく時は、彼女は自分の云つてゐる事を信じないのだ。ルツソオはウソをついて、その自分のウソをば信じたんだけれども。

これはゴリキイに語つたトルストイの言葉だ。

x

こんな風に書物を読んだ時、我意を得たと思ふ句をぬき出して、そこはかたなく書きつけて置くと、いつのまにか、それ等がみんな自分の發明した自分自身の句でもあるやうな氣がして来る。思想上の共產主義だ。

——七月十八日。

藝術に、originalité 科學に、specialité が重んぜられるのは、明らかに彼等が資本主義に捉はれてゐる證據だと思ふ。獨創、獨占、すべて私有の觀念の上でなくては、決して存在の出來ぬ價值だ。

——七月十九日。

あんまり雨の降りつゞけたせいか、からだ中へ濕疹の如きものが出來て、かゆくてたまらない。それが爲に何一つ手につかぬ。生理上の問題が、人間の日常生活にとつて、甚だ重大な地位にある事を思ふ。

——七月二十一日。

「十分なる文明に於いて、法律と習慣との事實により、人爲的に地獄を創造すると

ころの、又神性である定數をば人間的宿命にて紛糾さするところの、一箇の社會的永遠所罰が存在するであらうかぎり、卑賤階級によつての男子の墮落、飢餓によつての女子の敗類、夜業によつての兒童の萎縮、この世紀のこの三箇の問題が解決せられぬであらうかぎり、そこばくの地方に於いて、社會的窒息が可能であらうかぎり、他の言葉をもつてすれば、さうして更にもつと廣い見地からして、そこにこの地上に無智と悲惨とがあるであらうかぎり、この書の如き自然の書籍は無用ではあり能はぬであらう。

これが千八百六十二年、即ち今から六十一年前に、ヴィクトル・ユーゴーが、その「ミゼラブル」に題した言葉だ。

x

梗概や抜萃は二十年前から、日本譯や英譯で、何遍も読んで承知はしてゐるけれど、まだフランス語の本文では、一度も全篇を通讀した事はなかつた。さうして別段

もう通讀したいとも思はなくなつて了つてゐただけけれど、ふとこの題言を見て、いかに人類にとつて、しかくこの書が、作者のいふとほり、果して無用でない書であり能ふか否か、何となく檢定して見たいやうな氣がして來た。

x

考へると二十五年前、まぐれあたりに一高の文科へ入學出來た時、當時はまだあまり人のかれこれ云はなかつたフランス文學科をやるつもりだつたところ、はじめての時間割を見ると、第二語學は誰も彼も獨逸語をやる事になつてゐて、だまつてゐると、そのまゝ佛語はやる機會がなさうなので、不審でたまらず、早速事務所へ出かけてきいて見た。

——なに、フランス文科？　今年はそれには一人も入學者がなかつた筈だが……
——でも、僕の入學願書には、第一志望として、たしかにさう記入してある筈なんですが……

——そんな筈はないが……と、事務の人は願書を検べてくれたが、それが勿論私の云ふとほりだつたので、

——なるほどね……さア、困つた。と、當惑の顔をしかめた。

——フランス文科をやるにしても、獨逸語はやらなければならぬのですか？ と、何でも獨逸ばやりの時代だつたので、私はさうきいたのだ。

——いや、そんな事はない。これは事務の手落です。たとへ一人でも時間割はそれが爲に拵へなければならなかつたのですが……どうです、氣の毒だけれど、君は佛法の方へ行つてくれませんか？

——いやです。と、私は答へた。

私はその頃法律といふものが大嫌ひであつた。殊に佛法はお情けで入學させてもらった生徒の多いやうな、當時は甚だ不人氣の組だつたので、虚榮心の強い私は、たゞ虚榮心の爲にさう答へたものだ。

事務の人はしきりに弱つてゐた。何しろ私一人の爲に學校全體の時間割を変更する事は、この期に及んでは、もう容易な事ではなかつた。で、その由を懇へた上、

——佛法へ行くのがいやだと云ふなら、仕方がない。英文科へでも變更してくれるわけに行きませんかしらん……さうしてくれると、私達は助かるんだが……と附加へた。

考へて見ると、英文科だつて、獨逸文科だつて、廣いどれもこれもやつては見たいのだが、たゞ帝國文學で讀んだ、「佛蘭西文學を論ず」といふ上田敏氏の文章を頭に置いて、たゞそれだけの爲に、願書へさう記入して了つたわけだつたんだが、かうなるど、フラ／＼とすぐ氣が迷つて、

——え、そりや英文科だつてやりたいとは思つてゐるんです。と答へると、

——さうかね、それぢや、さうしどいてくれたまへ……なに、大學へ行く時には、又その時で、佛文科をやるサ……など、事務所の人は一ト安心したやうな顔で云

つた。

さういふアヤフヤな佛蘭西文學だつたのだが、因縁とは妙なもので、今日までも、やッぱりその同じ佛蘭西文學いちりを、さう、今日のところは、一生一寸もうやめられぬかたちになつて了つた。

x

英文はシエクスピーアを読む爲、獨文はゲーテを読む爲、さうして佛文はユーゴーを読む爲に、その時分は學びたいと思つてゐたものだ。

——七月二十四日。

三日間、何一つ手につかず、たゞウロ／＼して暮らす。改造社から印税をネギつて來たり、又その「文明病患者」に目を通して、あんまり誤植の多い事が氣になつたり、又こんなものばかり書いてゐては、そのうちには讀者から嫌はれて、結局、文筆

では飯など食へなくなるだらう、など、悲觀したり、それ等の爲に頭を支配されて、どうしても仕事がつゞけられなくなつて了つたものだ。さりとて意久地なし極まる頭だ。

——七月二十五日。

全く何もせず暮らす。暑い。

——七月二十六日。

きのふと同じ。但し、天氣はバカげて好い。キリギリスがしきりに啼く。

——七月二十七日。

かうして、何もせず、毎日ゴロ／＼してゐるのを見て、女房は、

——あなたには侵入者を防ぐ力はないのね。と、漸くにして私の弱點の一つを發見したやうに云ふ。

——ないよ。だから、こんな部屋にゐちや、中々仕事にとりかゝれないのだ。

バカに明るい、あけ擴げた、近所の物音が遠慮なく這入つて来る、さうして始終女房子が側を離れぬ八疊だ。ゴロリとしてゐるのには持つて來いといふ部屋だが、一心不亂になつて何かやるには、私にはどうも甚だ不向きで困る。

——信州かごこかの山の中へでも行つたらどう？

——日本の家屋は駄目だよ。山の中の宿屋は殊にいけない。襖一枚の隣室で學生なんぞが大氣焔でもあげてゐた日にや、到底仕事なんぞ出來つこはない。それにこの際遊山らしく旅行なんぞしてゐる金はない。

——改造社ちやどうしたんでせうねえ？ 一文も印税をくれないつもりかしら……

——さア、印税の印をどりに來て、それで一文もくれなきや、文士は甚だみじめな

ものだね。

——日本にゐてさへこの通りだから、外國へでも行つてゐたら、どんな事をされるか分らないわね。

——さうサ。そのつもりで出かけるんだね。いくら本氣になつて向ふから原稿を書いて送つても、すべて握りつぶして了はれるやうだつたら、それほど我輩と日本の出版業者と縁がきれて了ふやうだつたら、斷然もう日本語の文章は書かぬ事にして、パン屋でも料理屋でも何屋でもかまはない、我輩はたゞの労働者になる。あの行燈の廣告をシヨツて町角から町角を歩いてる、あゝいふ事でも何でもして、どうにかパンとフロマーシ位かへるやうにしようよ。

——意久地がない話ね。國辱だわ。

——國辱だつたら、國籍を除いてくれりやいゝ。廻りあはせなら、それも仕方があるまいよ。現にさういふ人達が世の中に存在するんだからね……それが若し厭なら、

さうならぬ今のうち、お前は子供を連れて、一日も早く我輩の側から離れ、遠慮なく
 独立するなり再縁するなりして、かまはないよ。

こんな文章なら、この通りいくらでも書けるのだ。かういふ私の文章ばかり喜んで
 読んでくれる人が、せめて日本に五千人あつたら、堀岡君は私達が巴里でつましく生
 活出来るだけの金を送れるといふ。どうかさうなつてほしいものだ。

——七月二十八日。

また濕疹のやうなものが一杯に出る。かゆくてたまらない。私の皮膚はもうだんだ
 ん抵抗力を失つてゆくのだらう。

x

有島事件、いろんな雑誌で読んで見ると、不快が一層不快になる。なせか知らん？
 到るところに虚偽ばかりコロがつてゐて、本當らしい事にはどうしてもブツかれない

からだ。が、それはその筈だ。本當の事は決して筆にも口にも現し得られるものではな
 いからだ。さうして有島さんの自殺を、そら来たどばかり、寸時を争つて、世人の好
 奇心をそゝり、それで一ト儲けしようと、あくまでガツ／＼した雑誌業者の態度を見
 せつけられると、同時にそれを承知しながら、あゝした上品らしい遺書を書いて情死
 した有島氏の勇氣？ を考へさせられると、しみ／＼今の世の中には愛想がつきる。

——七月二十九日。

暑い。やる氣が出るまで何もしない事にきめる。あともう三ヶ月足らずしきやない
 時日をば、今書きつゝあるものだけで、結局潰して了ふ事になるであらう。去年一月
 十五日神戸へ着いてから今日までの生活をば細大洩らさず書きしるさうといふ企て
 だ。小説になるならは別として、何故に私達が日本へ歸り、何故に私達がまた日
 本を去るのか、その私達の進退から、何かしら人間そのもの生物そのものゝ理法を

捉まへ得られたら成功だと思ふ。

一〇六

——七月三十日。

つまり、怠けくせといふものがついて了つたのだ。要するに、意志が薄弱で、隋性で、ダラ／＼と生きる、所謂ローリングストーンなのだ。けふこそは、——と思ふ。さうしていつも昨非となる。口を衝いて出るところのものは愚痴ばかりとなる。

x

昔からだ。氣がついて見ると、それは親譲りの傾向だ。とすると、どうにもならない。で、それを直さうとする事は、川の流れを塞ぎとめようとする企てと同じかも知れない。性に率ふ、これを道といふ。そこで、そのまゝほつとく事にする。と、だからだと、このとほり、「なまけくせ」といふ木地が現れる。

x

出来るだけいゝ原稿料にしようと思ふものと、それから、どうせタツだと思ふこの原稿と、机の上には毎日、その二つの書きかけ原稿が、私のペン先のとツつくのを待つてゐる。さうして自然この方が書きやすいので、この十日間は、つひこの方ばかり書く氣になつて了つたものだ。私は錢がほしい。併しいゝものを書かなければ錢がこれぬと考へてゐるところが我ながらシホらしいやうな氣がする。さうしていゝものとは一番自分の性に合つた文章をば充實した氣分で書く事であつて、必ずしも心にもない骨を折つたり、美辭麗句を案出したり、所謂「藝術」といふ閑人の閑技に浮身を裏したりする事でないのは、万々承知をしてゐるくせに、どういふものだから、錢のとれる原稿はといふと、つひ／＼さうなつて、いつも木に竹をついだやうな變手古なものばかり書いて了ふわけだ。私のやうな人間は、いくら困つても、瘦我慢して、錢の爲には決して原稿は書かぬ事にした方がいゝ。少くともその方が私には自然らしい。

x

一〇七

—本屋が印税の印をとつて行つて、それで一文も金をよこさずにすむものでせうか？

—さア、こツちが黙つて泣寝入りして了つたら、それはすむだらうよ。

—ほんとに一割五分ツて約束したの？

—なアに、こツちからは一言も云やしない。さきが勝手にさうした手紙をよこしたのサ。

—でも、一割二分と云つたので、五分なんて決して云はなかつたと、この通りがミガミ書いてあるぢやないの。

—去年よこした手紙を見りやハツキリ分るがね……併し、まア、どうでもいゝサ………くれたくなくれりや呉れないがいゝだらう………、要するに、私の本が、「死線を越えて」や、「愛すればこそ」や、「近代の戀愛觀」のやうに賣れない事が悪いのサ………賣れりや、こんな手紙は決して書きやしない………錢の顔の見える事でなけりやア、文藝

も、科學も、尊い箇人の生命の書も、クソも何もあつたものかい………今はさうした世の中なんだ………お互ひさまにネ………

—だから、賣れる本をお書きなさいよ。

—俺には出來ない。そんな事の出來る位なら、とうの昔に、さう出來てゐるだらうよ。

—さうすぐ子供のやうにスネて了ふから人に馬鹿にされるのよ。

—馬鹿に位されたつて死にやアしない。いくらでも馬鹿にするがいゝ。もどく馬鹿なら、しない方が却つてウツだらうよ。それで、みんながするんだらうよ。ザマア見ろだ。

—手がつけられないわねえ。

—だから、ホツとくサ。

x

金銭の話となると、忽ち開きなほる。小ブルジョアが一番さうだ。小ブルジョアが一番不愉快だ。さうして私は小ブルジョアだ。が、原稿かせぎがいよく出来なくなつた曉には、その時には、必ず小ブルジョアを脱却して了ふであらう。さうして大ブルジョアになるか、プロレタリアになるか、それは併しその時になつて見なければ分らぬが……

——七月三十一日。

九十度を越す。暑い。暑い。「解放」の八月號を読む。「改造」よりは余程左傾してゐるらしく見ゆるところが人を惹きつける。「改造」がその背後に何となく大ブルジョア臭を帯びてゐるのに、これは小ブルジョア臭を發散させつゝあるところが、私などには近いやうな氣がするのであらう。さうして彼はアナキスト的なところがあり、これはポリシエギスト的な夢を見せてゐる。双方とも夢だけだ。さうして望むところは双

方とも書肆としての成功だけにすぎなからう。今月は兩方の卷頭が長谷川如是閑氏に大山郁夫氏だ。兩氏とも「吾等」といふ機關雜誌を持つてゐる人だけれど、やはりかうしたものは「改造」とか「解放」とかいふものへ賣つた方が、たしかに大勢の人目に觸れ、同時に原稿料が這入つていゝ。長谷川氏の文藝論は徹頭徹尾賛成だ。さすがは如是閑だけあつて、本當に文藝を解してゐる。同様に科學に對する大山氏の主張も全賛成だ。

x
私も一生懸命勉強して大山長谷川兩氏のやうな學者になりたくなつた。頭のいゝ人は全く羨ましい。

x
私の羨ましい人々は、文壇では永井荷風君、あれだけ文章がうまくて、一世を俾倪して、さうして黙つてゐて月收五百圓這入るとかいふ事だ。宗教家では大谷光瑞、大

金を使つて思ふまゝの旅行癖が満足出来、氣に入つた土地に滞在して、時流には超然とした雑誌などを出し、さうしてそれで人類が救へるものと堅く信じてゐられるところだ。それからチャンと自分だけのラボラトワールを所有してゐる理科や醫科の大學教授、それから博物館長、圖書館長、考へると、いくらでも出て來さうだから、やめよう。さうして他人なんぞ決して羨まぬ事にきめよう。さうして女房子を愛する爲に一心に働かう。さうしてそれだけの事が出来たら満足してこの世を去らう。なごんシホらしい事はいくらでも書けるけれど、さて……

x

若し私が露西亞に生れて、アントン・チエホフと友達である事を得たら、私はどの位光榮を感じたらう。と、同様に、日本に生まれて、水島爾保布君と比較的親しい關係にある友人である事が、少くとも私には一つの誇りであり得る。「デイオジエンと十返舎一九」の對話を読んで、思はずこみあがつて來る愉快を愛へ書きつけずに置かれなくなる。

れなくなる。

x

山本實彦氏へ宛て、一割五分だ、二分だといふ問題について、一割二分で勘辨してくれと云つてやつた。先日同氏の意を受けた廣田氏が、不景氣だから一割にしてくれとネギつて來たのに對し、「結婚禮讚」の時に、五千部無印税だつた事や、それから一割五分と云つたのを一割で辛抱した事を書きならべ、一割五分にしてほしいのだが、今日不景氣で困るといふなら一割二分にしてあげてもよろしい、と云つてやると、山本氏は一割五分など、云つた覚えはないと、大變な見幕で云つてよこしたものだ。その問題なのだ。女房は返事を出すなと云つたが、どうせ貫はずにはゐられぬ金の事だ、早い方がいゝと思つて出した。もう十日も前に出版届も二千五百の印をもつて行つた「文明病患者」の事だ。スバラシイ誤植の多い、内容の支離滅裂な、同時に私自身

何はともあれ、かうした筆一本で、妻子を抱へ、フランスは巴里で、出来るだけ有効に、この日記の表題としたやうな、大膽極まる生活の筆はじめをしようといふんだから、並大抵の事ぢやない、改造社の山本君なんぞは、そんなケチな事を云はずに、思ひきつて、年に一万圓位づゝなら、無條件でお送金してあげますよ、とでも云つてくれるかと思つてゐたんだが……

x

一日に何遍となく子供が啼き立てる。責任をもつて附添つてゐる人間がゐないので、頭をぶついたり轉んだりするのだ。お互ひに手前勝手な人間は、自分の子供すら、本當に親切に育てられなくなつたものと見ゆる。あさましさのかぎりだ。

x

イヴオンヌの小便、出がわるい。

——八月一日。

日記でもつけないと、あまり申譯がないやうな気がする。熱時熱殺などいふが、熱い時は熱がつたつてよさうにも思ふ。さうして氣の向いたやうにゴロ／＼ねそべつてゐやうと、手當り方題の本を讀んでゐやうと、それでよさうなものだと思ふ。が、熱い時熱い／＼と云つて、なせ大ピラで熱がるわけにはゆかないやうな、そんな氣兼ね見たやうな心持が生ずるのかといふと、先月からかけて、私はまだ一文も錢をかせがないからなのだ。さうして文子はチャンと「婦人公論」の原稿を書いて、自分だけの分はズン／＼かせいで行つてゐるからなのだ。資本主義の世の中では、功利主義の實行者でないと、機嫌よく世に處してはゆけないやうに、全てが出来上つてゐる。さうしてそれは資本主義の世の中ばかりぢやない。ポリシエキキの世の中だつて同じ事だ。つまり、私のやうなグウダラベエは今の世の中ではどこへ行つたつて劣敗者になるより外に、少しも道は開けてゐない。と、恐らくさう思ふほどそれほど、私

の頭がこゝのところスツカリ功利主義にばかり傾いてゐる證據であらう。同時に、それだけでなく、とてもこの先、人間らしく生きつゞけてゆけないからであらう。

x

近いから箱根へでも行つて見ようかと思ふ。が、錢のいる事を思ふと、すぐやめて了ふ。それがいくらの錢でもないのだが、この際一厘一毛たりとも、つかはずにすむものならすまさなければならぬ破目にある。それは三月後に洋行といふバカげて金のある事をば控へてゐるからだ。

x

この前の洋行には洋行前洋行費の半分費つて了つた。あの時の失敗はたゞに金の事はかりぢやない。私にとつてはすべてが失敗だつたのだ。それだけ文子にとつては、或は正反對に大成功だつたものなのであらう。さうして私は恐らく人類の一員として彼女の成功を祝福しなければならぬ義務を有するのであらう。被征服者が征服者に對

して常に捧げるべく強ひられてゐる祝福のやうに。

——八月二日。

どうもかう仕事にかゝる氣にならぬのは自分ながら不思議だ。或は去年以來の病氣がまだ本當になほつてゐないのかも知れぬ。或は既に精神病者になつて了つてゐるのかも知れぬ。さうだとすると、將來もう廢人だ。廢人には妻子を養ふ力はない。況んや自分自身をや。

x

併し愛の家ははじめから自分の氣には入つてゐないのだ。たゞかうやつてゐると雜用がかゝらぬので、それが爲ばかりで辛抱してゐたわけだ。去年の病氣も一つはそれが原因であつたやうに思ふ。

x

爰の家にゐるのは非常に窮窟だ。一刻もイーजीに感ずる事が出来ない。私は正直のところ爰の家の人達を目撃してゐると、一ト通りならぬ心に壓迫を感ずるのだ。それがなせだか自分にもわからない。

x

この正月京都で園君の言に、「それは人の家だからいかんだ。たとへ自分がすべての責任を持つにしてからが、自分の家へ姑さんでも誰でも置くやうにせにやいかん。」とあつたが、全く一理ある。併しもうあと二ヶ月と何日かの辛抱だ。辛抱して出来ぬ事はない筈だ。まさかたゞそれだけの爲に死ぬやうな事もあるまい。

——八月六日。

突然下痢を起して寝る。九度近くまで熱がある。何かの中毒だといふ。前の晩にのんだサイダーかも知れない。けふで九三日になるが、まだ本當に下痢がとまらぬ。

x

印税は一割一分となる。どういふわけだか、二千五百部のうち千九百七十八部だけの分を郵送してよこす。こつちにもいろ／＼使ひ途があるのだが、さういふ風にケチくさく刻んでよこされると甚だ困る。

x

米國大統領ハーディングが死ぬ。死ぬ事を思つたら、一錢二錢争ふのがまことに下らぬやうに考へられる。まして世の中には大統領なんてものがあつて、我々とは全く別な好都合な世界に住んでる人間があるのかと思ふと、いよ／＼馬鹿らしくなる。尤も誰か私を大統領に選んでくれたら、勿論私は喜んでなるけれど……

——八月八日。

腹の工合がまだ悪い。

きのふ加藤謙君遊びに来る。ノンキな話して愉快な一日を送る。人生ではどうもノンキな時間が一番尊いやうに思ふ。

x

ドオデエのタルタラン・シユール・レ・ザルプを読む。これは五六年前古本屋で買つてそのまゝ読む氣がしなくなつて了つた本だ。が、ふと目にとまつて読み出して見ると、曾遊のルツアンからインタラーケン、ユレグフラウなどの事が、例の彌次喜多の筆鋒で面白をかしく書いてあるので、思はず一氣に百五六十頁讀む。何しろ千八百八十年代のアルプス紀行だから、今日とは大分かけ離れてゐるところが、惹きつけたものだ。尤も一九や廣重の東海道と今日のそれと比較する感じとは大變にちがふけれど……

x

高等學校へ這入つた年、英譯のタルタラン・ド・タラスコンを讀み、外國の文章を思

はず腹を抱へながら讀んだ第一の經驗を得たものだ。膝栗毛のすきな私が、それと似たやうなものを西洋に發見して、同時に驚喜したはじめでもある。尤も元祖のドンキホーテはそれから後に讀んだけれど、タルタランほどはどうしても笑ふ氣にはなれなかつた。アルプスのはそれに比べると、木曾街道や金比羅ほどは落ちないが、かなりアテ込みが多くなつてゐる。併しアルフォシス・ドオデエの作中ではこの本が一番賣れてゐるところを見ると、今更ながら人氣必ずしも作者の生命でない事がいよく顯著になる。

x

「鐘が鳴る」の八月號を見ると、安成二郎氏が有島武郎さんと私とを比較した文章を書いた事を述べてある。別に讀んで見たくも思はないが、私も三萬圓歐羅巴へ御奉公した爲に、中々エラクなつたものだとは思ふ。殊に有島さんと比較されるのは光榮この上なしだ。さう云へば今年のはじめだか、中國邊の某勞働者から手紙をもらつて、

「お前は有島武郎より俺達に近い」と書いてあるのを讀んだ事があるが、今にして思へば、恐らくその勞働者は安成君のその文章を讀んだ結果さういふ手紙を私へ書いてよこしたものであらう。

x

最近に讀んだフロオベルの「レデュカツション・サンチマンタール」などの事を思ふと、ドオデエは甚だ低級なところがある。フロオベルは何と云つても近世小説家の第一人者だ。ドオデエにかぎらず、ゾラ、ツルゲニエフ、トルストイ、ゴンクール、下つてモオパッサン、チエホフ、みなどうもフロオベルに比べると、どうしても一等を輸せざるを得ないやうな心持がする。今度の巴里行では一つ思ひ入れフロオベルを研究してやらうかなど、考へる。

x

研究と利用とを取ちがへたのが十年前の日本の自然主義者だつた。熟讀して眞似さ

へすればそれで文藝はいゝものだと思つてゐたものだ。その意味に於いて、藤村、花袋、白鳥悉く模倣家だ、但しこれは文藝にはかぎらぬ。「廣く智識を世界に求め」て、それを一生懸命で模倣したのが明治大正の文明だつたわけだから、文藝ばかりが模倣だつたわけぢやないのだから、怒つてはいけない。尤も今頃になつて怒る奴もないけれど……

——八月九日。

昨夕、生田葵山來る。大分やつれた。一二年で五十だとかいふ。併し秋聲君など、さう違はない筈だから、多分もう五十は越してゐるのだらう。尤もそれにしては若い。二十何歳も違ふ女房が一年半來腰の立たぬ病氣で難澁してゐるさうだ。藤井と共に氣の毒に思ふ。先日山本三郎氏から手紙で、藤井の妻君が氣がちがつて入院中だから、舊モザイクで據金して送らう、と勧誘して來たが、冷酷のやうだが、體よく拒つ

た。十年前、藤井の生活問題に關して、それとモザイクとを關聯させた方法を講じようとして相談を持ちかけた事があつたが、あの時は山本の方が拒つた。「同情は罪惡なり」——別にさういふ信條を立て、云ふわけではないが、當時の山本が持つてゐた思想を思ひ出して、それで拒る氣になつたものだ。生田は併し藤井の事を、「あの男はナマケモノだからね。」と云つてゐた。さうして、「小山内はエライ。人間は別にエラクも何ともないけれど、「朝日」と「中央」との二新聞へ長篇を同時に書けるエネルギーの強い點がエライよ。その上永井荷風などを誘ひあはして、相變らず藝者買ひもやつてるんだから、いよ／＼驚くべきエネルギーだ。」なども云つてゐた。生田の思想はアダム・スミスの富國論と同一のそれだ。「働かさへすれば金がとれる。さうして幸福が買へる。その出來ないものは罪人だ。つまり貧乏は罪惡だ。」といふやうな一點から離れない。天下泰平だ。

x

姑とイヴォンヌを除いて、女房も女中も、それから私と、一同病人になる。電報うつて、東京からお久さんに應援に來てもらふ。暑氣は貧乏より、權力より、それ以上に厭だ。

x

二十日目位で仕事に着手する。三ヶ月かゝつて七十枚、その間に鼻の方は二ヶ月で百五十枚も書いてゐる。フロオベルがサラムボー一冊書きあげぬうちに、モオパッサンは二十六冊の全集を樂々と書いて了つてゐる。私と鼻との筆力を比較するのは聊か當を失してはゐるが、勿論實質は論せぬものとして、單に流儀から云へば、まア、そんなものかも知れぬ。が、この機を逸せず、毎日勉強して、出發までに三百枚にはしたいと思ふ。

——八月十日。

島の中で、掛聲にぎやかに、二箇所ならんで、地ならしをしてゐる。家が三軒建つのだといふ。男女の土工はのどかな聲をのびくとほりあげる。何となく太古のやうな心持がする。階級戦の宣傳のやかましい現代のやうな気がしないのだ。かくして小さな家が殖えてゆく。小家族主義の新家庭が出来てゆく。小ブルジョア思想が發展してゆく。かうした新しい家の建つてゆく傾向から考へると、日本は漸く親子が分離して、兄弟が各自獨立して、箇々の小家庭が對立して、それからわづかに箇人主義に目ざめてゆく原始社會一般の道程をとりつゝある最中にすぎないところらしい。歐羅巴からはたしかに百年後れてゐる状態だ。さうして、この傾向をば、あれだけが三井より餘計に金持だと云はれてゐる三菱ヶ原なる、かのアメリカ流のバラック、ビルディングと對比して考へると、その間に一ト通りならぬギャップが生ずる。さア、そのギャップだ。そのギャップを填めなければならぬ何物かだ。地殻の薄弱なところから噴火山は爆發する。日本は由來火山國だ。地質學的に云ふと、地殻の弱いところは到る

どころにある。岌々乎として危い哉とは昔の燕趙悲歌人のネゴトだが、さて、太平洋の海底には恐ろしい地這りの震源が、四六時中、いつにかぎらず、突發を用意しつゝある。恐ろしいこと、恐ろしいこと……

——八月十一日。

バリ／＼といふ大雷雨で震へあがる。大嫌ひだから、實際生きた心地はない。蚊帳の中へはいつて、頭からスポリと蒲團をかぶり、大汗をかいて、齒をくひしばる。

——大きなナリをして一向どうも頼もしくもないね。と、女房は笑ふ。勿論、鼻も大嫌ひなのださうな。昨夜の話だが、けふもどうもあぶない。そこら邊で、もう既にゴロ／＼やつてゐる。

x

私のやうな臆病者は、どうしても、雷のない國、地震のない國、洪水のない國、要

するに天災のない國土に住みたい。日本の天候は甚だ荒い。地理的關係で止むを得ないだけそれだけ、一日も早く外國へゆきたく思ふ。尤も世界を家とするのは、必ずしもこの臆病心からばかりでもないけれど、雷などがう頻繁に鳴られると、少くともさう思ふ。鼻の話に、大谷光瑞もキラヒださうな。それに反して光演の方は平然としたものだといふ。劉玄德は曹操に對して、青梅酒を煮て、英雄を論じながら、青くなつて杯を落した、と三國誌にあつたが、必ずしも梟雄の人を欺く方便ばかりでもなさうに考へられる。

x

佐渡君の言傳に、雑誌はやはり保證金千圓積まなくては出来なくなつたといふ。私の日記は時事問題に觸れてゐるからださうな。さうしてその千圓を工夫する爲に、發行期が後れて、どうしても二十日にはなるといふ話。もどく私といふものを商品にするつもりではあるといひ條、堀岡君には氣の毒にもなる。併しお互ひにこれからは

「氣の毒」は禁物だ。相互扶助には先づ相互獎勵が肝要だ。私は勞力を提供する。堀岡君は金を集めて来てくれなければ困る。女房曰く、「あんな頼りない人の爲に、原稿なんぞ、オイソレと書いてやるのはおよしなさいよ。改造社並みの原稿料を先へとつてから渡しておやりなさい。」と、しきりに智恵をつけるけれど、つひ、かう、この原稿は、何の苦もなく書きたまつて了ふものだから、要求されるまゝに、つひく、ウカくど渡して了ふ。

x

「結婚禮讚」の中へ、堀岡君の事は、H氏として書いたが、辻潤君が評して、「あんなに書かれちやア、Hといふ人はきつと怒るだらう。」と云つた。辻君の説の如しとすると、私は或は堀岡君の爲に、かくして復讐されつゝあるのかも知れない。范睢は睚眦の怨み必ず報ありと云つてゐる。

x

けふは雷雲が散つた様子。ホツとする。

——八月十二日。

虫の這ふやうに、とにかく、一行でも仕事の捗がゆくところが、不思議な氣もする。文章といふものは、一度書きなほしはじめると、何枚書きなほしても、ますます氣に入らなくなるものだ。けふは四行ばかり進む爲に、二十枚も書きつぶしをした。イヴオンヌが恐ろしくおしやべりとなる。

——八月十三日。

大磯の牛肉屋の御用きゝの言に、先日點呼に行くこと、士官が「來年アメリカと戦争するから、赤い紙が廻つて行つたら、すぐ出て來い。彈丸除けにしてやるから。」と云つてゐたさうだ。

x

軍隊がある以上は、いづれ戦争はしなければならぬ。さうして戦争があるたびに、金持はいよ／＼金持となる。特權者の地位がますます鞏固になる。さうして一方ではプロレタリアがだん／＼に首を擡げる。どうせなければすまぬ戦争なら、一日も早く突發してくれた方がいゝ。私は併しアメリカ人は嫌ひだけれど、別に憎惡は感じない。

x

誰も手紙をよこさない、誰も文章なぞ頼みに來ない。

——いゝものさへ書いてありや、人はきつと頼みに來るんだけれど……と、女房も私の無能力にはしみ／＼愛想がつきた様子。

これで洋行でもしたら、もう日本とは縁きりだ。いよ／＼野たれ死の序幕がはじまつたものか。

x

うるさい。く。人聲がうるさくて、気がちがひさうだ。

二三二

盆ださうで佛壇にいろんな物が獻げられる。これが一切の過去を代表する因襲なのだ。こいつを打ちこはすつもりで、自分の家をすて、エラさうに鞆一つになつたまではいゝが、結局、女の家へ居候になつて、その佛壇に火がつくを傍觀する事となる。私の兩親の位牌の供へられた佛壇は、お花婆さんが死んだ以上、恐らく横濱のどこかの古道具屋に並べられてゐる事であらう。要するに、私の一生はあまりに靦面な矛盾と皮肉とに満ちすぎてゐる。

——八月十四日。

お祭りの稽古か何か、トコトン、トコトン、テンツク、テンツクと、炎天をジイジイと鳴き立てる油蟬にまけず、馬鹿囃子がしきりにきこえてゐる。暑い。併し、關東

の音だ。あの音は關西ではさかれぬ。團扇太鼓、八木節の調子、すべてあれだ。ジャワあたりの音をば何となく偲ばせる、甚だ原始的の民族が想像されて来る。それに反して關西の音は、例の祇園囃子だ。一千何百年に涉つた五畿内文明を髣髴させて、野趣を帯びたところなご樂にしたくもなくすツかりリファインされて、何となくラテン的な爛熱した感じさへ惹起しさうになる。頼山陽の日本外史は武門武士の勃興に筆を起してゐる。蘇我氏と、物部氏との軋轢が、藤原氏の外戚政治で統一され、輸入した佛教文明と唐制の摸倣で夜も日も足らず、皇族間の權力争奪に参加した源平兩氏、それから天下が麻の如く亂れて、北條氏、足利氏、豊臣氏、徳川氏と戦國と封建時代が續いた後、恰も六國を併呑した秦に對して、漢楚が反逆を企てたやうに、薩長、土肥が尊王攘夷だなどゝ、どうく幕府を轉覆して、所謂「廣く智識を世界に求むる」政治をはじめた結果が、日清日露の兩役となり、さうしてそのまた結果が今日となつたわけだ。今日！ 獨露の共產國や社會主義國と提携しようか、英米佛の資本主義國に

二三三

追隨しようか、千番に一番のカネ合といふ、權勢といふものに関係のないものから見ると、甚だ微妙な面白い時代を現出し來つゝある今日だ。もう、日本外史や、徳富蘇峰や、單純なる國粹や、愛國や、仁義禮智五常の道や、治國平天下や、そんなところぢや追ツつかなくなつて來た。テレックテレック、スト、ン、トン、馬鹿囃子はまだやつてゐる……

x

ツク／＼ポウシが啼いて、少し秋らしくなつて來た。

——八月十五日。

きのふ堀岡氏夫妻、十一歳になつた芳江嬢をつれて來る。漸く保證金が出來て、その筋へさし出したが、届出後十二日すぎないと雑誌は出せないさうだ。そこで後れつひでに來月一日發行といふ事にしたから、どうか……なご、云つてゐた。恰も讀賣新

聞の日曜附録に、加藤謙氏の筆で、「無想庵異談録」といふものが出てゐたが、その中に堀岡氏の事も、こま／＼と書いてあつた。かくして堀岡氏と私との惡因縁は世間周知の事實となる。どつちにとつての惡因縁か、それは分らないけれど……又、或は惡因縁でなくして、却つて善因縁であるかも知れないけれど……

x

どうしたんだか、また今日はスバラしく暑い。何だか今年中で一番暑いやうな気がする。

——八月十六日。

昨夜山本實彦氏來訪。印税問題で御機嫌を損じやしないかと心配して來たと云ふ。中々如才がない。如才なさ序でに机上に書きかけてあつた、六月以來もて扱つてまだ三分の一ほどにしきやならぬ原稿まで持つて行つてくれる。かうなると、又山本様々

だ。我ながらがづくした料簡に、しみく愛想がつきる。これも原稿生活の悲哀の一つか。

一三六

——八月十七日。

「今ごろは上海かも知れないと、先日佐藤春夫が云つてゐました。胸に愁あれば夢想庵も亦なげくといひ合つて大いにしのびました。二の宮にお出でなのでしたか。

今「讀賣」をみて知りました。

「小生はけふ酔ッばらツてゐます。膝でこんで行つて、お話したい氣持です。

僕はあなたに對して駄目です。それ以上にみんなは駄目です。生に對して見解と目標がちがふのです。——といふよりも見解と目標とを混同して、更に無意識的に現代的に流行的に行爲してゐます。——みんなといふのはあなたに關した人の事を私が觀

たことを意味します。

不遜なる青年をお知り下さい。

x

「どうしても、日本を去るのですか。感慨無量です。一日理屈と情熱とを持つて御たづねします。

御はなし下さい。

辻潤は御葉がきで住所をたづねたさうです。令夫人のにぎりつぶしに會つたのじやないかといつてゐます。然る所以をわかつていたゞきたい……云々」

山内恒身君の手紙の一節だ。加藤謙氏の仕事がいろいろに影響したものだ。因に云ふ。山内君は「結婚禮讚」の中へ「早稻田の哲學生」として私の爲にモデルに使はれた人だ。

x

羅馬のカピトレで買ったネロの繪葉書を紀念の爲に山内君へ贈る事にした。私の考へるところでは、ネロはたしかに人間の一面をば忌憚なく人生記録の表面へ露出させた男だ。それで思ひ出すと、有島武郎君はさうした一面をば、わづかにベトロニウス程度まで攀ち登つて力つきたものだ。山内君はごころ邊まで漕ぎつけ得られるか。私はかつて佐藤春夫君の一面を評して、多分に「ネロ」を有してゐる男だと、山内君へ語つた事がある。

人生は短いやうで割合に長い。

x

——いかんかこれ劍及上のこと？

——禍事、禍事。

地震、雷、疾病、鬭争、その他不慮の災害、そんな事を思ふたび、この臨濟の荅を考へて見る。「禍事、禍事」とは、「あぶない、あぶない。」といふ事だと、死んだ毛利

湛然居士が私に教へた事がある。

x

湛然居士は薄田泣菫氏の小學校時代の先生で、私の京都新聞時代の愛讀者だったが、十年ほど前、臨濟宗の僧侶となつて死んだ。その人については他日一文を書きたいと思つてゐる。私と禪との關係が若しあるならばだ。

x

島の中へ建つ三軒のうち二軒だけタテマへといふ儀式を行ふ。棟組があがると、その上へ、鋒に形どつたものに紅白の吹き流しを靡かせ、弓矢に形どつたものをそれに並べ、職人は皆新しい印絆纏を着て、キャリを唱ふのだ。藤原朝以來の古式なんだから。

x

かうして年々新しい小家が建つのはスバラシイ勢らしい。田山君は去年、談たまた

まその點に及び、「一二年しきや住めぬやうな家をごしく建て、常に新陳代謝をするのは、甚だいゝ傾向だ。」と、云つてゐた。人生に對する一面の眞理だが、私はウキースパーテンのネロタールに並んでゐた新式の獨逸住宅を思ひ出して、心の中では、さうした田山君の眞理とはまるで反對な事を考へてゐたものだ。芭蕉西行だけで一生を終始出来るものなら、それは堀立小屋時代に屬する日本家屋に住みとほし得るけれども、西洋文明の「物質」に、一度目のさめた、或は目のくらんだ私のやうな人間には、どうも、なかく、さうは容易に悟りが聞けさうにない。我々の頭はもう徳川氏の鎖國政略には服従してはゐられなくなつてゐる。ゐられなくなつてから、もう約一世紀もたつてゐる。それでもかうした家のあとから、出て來るところを見ると、さうして満足らしくその家へ住んでるところを見ると、鎖國時代の遺傳が日本人の頭からはまだ一向に抜けきつてはゐないやうにも考へられる。従つて、もう一度「黒船」の必要がある所以であらう。そんな事を考へさせられる。

——八月十八日。

武者小路君が若い女に子を孕ませ、糟糠の妻に若い男と乳繰り合ふ事を許諾したんださうだ。有島さんの「共産主義」と似たやうな事件だ。白樺の人々はなせかう揃ひも揃つて頭が悪いのであらう。亭主がヒステリーの古くさい女房を閉却し、若い女に手をつけ、孕んだので妻とし、その緩和策として女房の役者買ひを大目に見てゐる、といふやうな家庭は、株屋なぞに澤山ある。それと武者小路君の場合と少しも異なる。有島さんが忠兵衛や治兵衛と大して違はなかつたと同じやうに。一体、白樺派の人々は社會と妥協してゐるのか戦つてゐるのかさつぱり分らない。御自分達も恐らく分つてゐないのであらう。さうだと見えて、相變らずいゝ氣なものだ。人類は由來樂天家ださうな。「ハッ、お左様にムりまする。」と平伏がしたくなる。

——八月十九日。

かなり涼しくはなつたが、日中は未だ相當に暑い。この部屋の前の青桐が四株、大きな葉を快く擴げて、ふとその成長の著しさに驚かれる。ステツキほどのものを植ゑたのは今年のはじめだつたが、今はその時の三倍以上の太さと三倍以上の高さで枝が五六本一尺四方中には二尺四方の葉が三十枚位づゝ附着してゐる。いざ發達するとなると、生はスバラシイ勢を示現するものだ。かうした分りきつた事實が一番今の私には嬉しく感じられる。

——八月二十日。

「久しぶりの貴翰拜見、いよく日本を見限りての再度の壯圖を迎へるのは大に愉快、その時日ならば、ガールドリオンでイボちやんを迎へる事が出来ると楽しみにして居ります。さうして家の儀は、家具なしのものを借りて家具をいれて住む方が安上りだから、その節探す方がよいと思ふ。さうすれば二千法一ヶ月でオンの字ださうだ

から心配はいるまいと思ふ。尤もフランス人と同じ生活の事を云ふのだけれど……ラン益々下落だから決してかへてはいけまいと思はれる。とても獨乙の二の舞か。二人とつくんで、くそだめへ落ちた形サ。氣の毒でもあり笑止でもある。パリも變つた。變らんのは名主だけだ。名主が變らん内に早く来てくれ給へ。」

七月二十四日に出した手紙がアメリカ通過でもう来たものだ。大住嘯風君の手紙だ。イヴォンヌの名付親だから、我々には親類格だ。尤も巴里へゆくほどの日本人で大住氏の世話にならぬ者は少いから、誰でも同氏を親類の一人と思はぬものもあるまい。それほど嘯風氏は親切者なんだ。耳はやゝ遠いが、頭の齒切れが馬鹿にいゝ。長谷川如是閑氏と双壁たり得べき甚だ篤學なる極めて人格的の江戸つ子だ。巴里に止まる事五ヶ年、親鸞傳を佛文で出し、又日本佛教文明史を同じく佛文で著作中だが、その完成次第一應歸朝するとか云つてゐた。

——八月二十一日。

一四四

朝日の朝刊に小山内君の「背教者」が出てゐるので時々讀む。内村鑑三の「聖書の友」へ馳せ參じた時代の同君自身の体験談から書きはじめられてゐる。百回を越してから「異教の友」といふ題下に先づ川田順氏が三澤といふ名でモデルになつてゐる。さうしてその次の林といふ罵倒家が私だ。けふはその罵倒家の肖像が挿圖になつてゐたが、私とはまるで異つた人物だ。少々悲觀する。併しこの小説を讀んでゐると、私もあの時分の私といふものを中心として、かうした一大長篇が書きたくなる。昔から一度は是非書くつもりではゐるのだが……

x

川田順氏熊野へ行つたと見え、本宮から一枚、田邊から一枚、繪葉書をよこした。殊に田邊からのそれには、一高時代の同窓脇村民次郎君と合作のそれだつたので、なつかしい心持がした。脇村君は田邊の高等女學校長だとかきいてゐる。一高にゐた時、

ベルゲル氏の獨乙語會話の時間、脇村君はベルゲルに「お前はプロイテイガムか？」ときかれて、「ヤア」と答へ、ゴツと皆に笑はれたものだ。二十一や二で花聲である奴はない筈だと思つたから笑つたのだつたらうが、脇村君は或はその頃から花聲であつたので、それで正直にさう答へたものだつたかも知れない。その頃の一高を思ひ出すと、いろんな感想がわいて來る。併し人生は一高ではない。少くとも一高時代に考へてゐたやうなところではなかつた。夢の時代、叙情詩の時代、理想ばかりの時代、さうした私の一高時代は、顔の赤くなる事も多いが、又同時に再びもう得られぬ二十代の若さが、嫉ましく追想されても來る。一高ばかりの人生だつたら、どの位私は幸福だつたらうよ……

——八月二十二日。

珍しく雨。午後蒸しあつくなる。頭が少しいたい。

一四五

原稿紙がなくなつて、使ひつけのど別なのへ寫しかへたり、又それでは氣がすま
 ず、いつもの積善堂のを小田原から送つてもらつて、再びそれへ寫し直したりしてゐ
 るうちに、一週間たつて了つた。どうしてかう原稿を書くのが苦しいのか分らない。
 いろいろ研究して見るが、何しろ朝のキツカケが悪いので、それで棒先をきられ、つ
 ひとりかゝる機を失つて了ふのらしい。ゾラの如く規則的に一日に必ず何枚と書ける
 やうにならないと、原稿商賣は甚だ心元ない。

x

本は一昨年の一ヶ月頃買つて、去年四百頁ほど一気に讀み、そのまゝ放り出してあつ
 たのを、又とりあげて、思はず讀んで了つたのが、ヴィクトル・マルゲリットの「ブ
 ロステイチユエ」だ。二卷五百頁の大作、十五六年前の作だ。小説もこの位深刻に書
 いてあると、思はず作者に敬意が表したくなる。レオン・ドオデエ氏の如くゾラの小説

説の嫌ひな人は、かうしたものも恐らく好むまいが、ゾラのが若し「下水のロマンテ
 イズム」なら、これは「下水のナチュラリズム」かも知れない。梅毒の問題が歐羅巴
 文壇でしきりと取扱はれてゐた時代のもだから、今日はもう少々デモデの感がない
 でもないが、まだよまぬ人には一讀の價值はたしかにあると推奨して置く。

x

私が文科大學にゐた頃、ゲーテの「ゲデイヒト」だの、「キルヘルム・マイステル」
 だの、「デイヒトウング・ウント・ワールハイト」なんぞを拾ひ讀みしてゐて、時々西
 大久保の島崎藤村氏方を訪れ、しきりと同君の若菜集を思ひ浮べながら、その話をす
 ると、藤村氏は私の迂濶さを冷笑する如く、「もうゲーテでもないでせう」と云はれ
 た。私は一寸變な氣がした。藤村氏は一二年前に、ドストイェフスキイの「罪と罰」、
 トルストイの「アンナ・カレニナ」、フローベルの「マダム・ボヴリー」のそれ／＼英
 譯を讀んでから、新體詩の足を洗ひ、自然主義の小説を書きはじめてゐた人なのだ。

さうしてその西大久保で「破戒」が完成したわけだ。私は同氏の「マダム・ボヴリー」を借りて歸つて讀んだが、その時分にはなせフローベルが偉いのか實のところハツキリ判らなかつたものだ。同様になせゲーテでもないのか勿論藤村氏の言は判らなかつた。併し今にして思ふと、當時藤村氏の頭は「自然主義」といふものゝ夢で一杯になつてゐたものだつたのだ。従つてそれから一時代前の夢たるゲーテ、バイロン、ハイネなどに引ツかゝつてゐる者が、甚だ愚かしく見えたものであらう。何しろ、その時分には、西洋の大作を摸倣さへすれば、それが一番エライ文學だつたものだから、無理はない。書家が法帖でも習ふやうに、西洋小説の書き方を習つてゐたものだ。それが十年前の「自然主義」運動だ。大化改革以來、摸倣の外殆んど全く自分自身の「文化」を持たぬ日本人としては、摸倣の巧みな藤村氏などはたしかに偉大なる作家であるに相違ない。徳川時代には曲亭馬琴といふスパラシイ摸倣家がゐたものだが……

なせこんな事を書いたかといふと、また、藤村氏に、「フローベルでもないでせう」「マルゲリットでもないでせう」と冷かされさうな氣がしたからだ。今日デモデであるが爲に。

——八月二十三日。

すきとほるほど澄みかへつた好天氣だが、頭が軽くない。どうも寝不足で困る。

x

仕事にかゝる氣が出ないので、寝ころんで、そこらにある雑誌など見るともなく見る。「女性改造」に連載中の「出世五人男」といふのを讀んで馬鹿に面白かつた。これが本當の小説だなごと思つた。宇野浩二君には一度逢つた事がある。それは紅蓮洞が小石川の家にある時分の事、水島爾保布、佐藤春夫もゐたと思ふが、東方町の澤田正二郎方を訪づれ、それから大勢で白山下の女優村田榮子のゐる下宿屋へ押しかけた、た

しかあの時一緒だつたと思ふ。「フン、君は宇野君といふのかい……宇野哲人ツて人があるね……」なんて話しかけた事など覚えてゐる。併しこんなスバラシイ小説の天才とは一向氣がつかなかつた。顔もよく思ひ出せないが、内氣な人だツたとはかすかに覺がある。とにかく宇野君の小説はいつも私には愛讀されてゐる。去年「改造」へ出てゐた、題は忘れたが、何でも東照宮下の例の有名なアバルトマンの事を種にした小説など、全くうまいものだと思つた。デイクンズ、アルフォンス・ドオデエ、十返舎一九、さう云つた非常に丸みと暖みとを興へてくれるやうな作者は、今日では非常に拂底なのだ。人類愛を高唱する白樺一派の人々には私はいつも反感が起つて來てしかたがないが、宇野君の小説をよむと、いつも人類愛そのものを感じて來る。まじめがる奴は大抵不眞面目であたじけなくて虫がよくていゝ氣なものだが、宇野君のやうな一見人を馬鹿にしたやうな作品こそ却つて本當に人間生活といふものに對して眞面目な心境を把持してゐるものなのだ。

x
 イヴォンヌが鎌をいたづらして突つきちらしてゐる。危い！と云つてゐるうちに指を買いて大騒ぎする。四人もそばに女がゐての話だ。幸ひ小さな怪我ですんだからはいやうなものゝ、いくら女がゐても責任者がないのだから棒きれの役もしない。馬鹿げてる。

——八月二十四日。

午後から又雷鳴 蚊帳を釣つたり、線香を立てたり、折から來訪中の堀岡夫人及芳枝嬢まで我々三人と共にその中へ這入つて、その通過を待つ。本當に怖がるのは、そのうち、但し私と私の妻だけだ。

x
 青桐だと思つてゐたが、堀岡夫人に教へられて、なるほどたゞの桐の木だつた。五

本素晴らしい勢ひで發育しつゝある事は先日云つたが、それが五本がそれくゝまるで互に二年も三年も年齢の異ふやうに大小がある。地味のいゝところへさし込まれたのや、日當りのいゝ地位を占めたのなどは、洵に金持の長男に生まれて意氣揚々たる姿がある。それに反して、日影や地味の悪いのは、見すばらしい事夥しい。要するに「種まきの譬喩」だ。とにかくそんな事ばかりが考へさせられる。よほど頭に餘裕がある證據だ。だから創作が進まぬ。

——八月二十六日。

加藤首相が死ぬ。待つてましたと新聞では政變問題を云々する。愛孫の父船越隆義を養子として襲爵させようとしつゝある馬鹿野郎もある。船越隆義は私の中學時代一二年下の級にゐた美少年の一人だった。川崎の技師山川麒一郎と一緒に八官町にゐた船越の家へ遊びにゆき、ニウトンと林檎の話などした事を覚えてゐる。當年の美少年

も四十男だが、徒らに周囲の事情に左右されてる有様が手にごるやうに見えて、一寸氣の毒にもなる。同時に美少年のお蔭で運よく華族になれた事が、一寸羨ましくもなる。美少年と云へば、小田原の鐵道省技師長かなんかしてゐる中村謙一も同窓の一人だが、これも親父が死ねば華族になる。親父といふものが爾靈山の白樺隊長中村覺將軍だ。芥川龍之助の小説に「將軍」といふのがあつたが、そのモデルになつてゐる。歐羅巴からの歸途、北野丸でテーブルを共にした山田内務省技師が、工科大学で中村と同窓だつたさうだが、しきりに中村が親の威光で華族になれる事を羨ましがつてゐた。私も同感だ。その中村の女房が私の鼻の子供洋服の弟子ださうで、一度爰へ來た事がある。中村は頭がスツペリと禿げて了つたさうだ。

x

グレさんが一年ぶりで作つて來た。五十八になるさうだが、頗る元氣がよくて嬉しい。澤正や宇野浩二の話なにかしてゆく。宇野浩二は今富士見町とかの藝者に惚れ込ん

で大騒ぎしてる最中だなどいふ。宇野君の小説をほめちぎつたのは二三日前だが、その原稿料でノメくと藝者狂ひなぞしてるのかと思ふと、少々興がさめて来る。尤も藝者買ひは今日の日本では、一人前の人間なら、必ずやらなければならぬ事になつてゐる、紳士資格の一つだから、興をさます方が間違つてはゐるだらうが……十年前には私も大いにやつた事があるくせに、今更それを忘れたやうに道學先生顔するのも甚だ卑怯だけれど……併し、現在では正直それが不快に感じられるのだ。恐らく私の根深いイゴイズムが惹起す不快だらう。

x

七月十五日発行のクラルテが来る。パルピユッスがガンデイを譯してゐる。山川均君などの譯と異つて、レーニンと同じ程度にまで引上げてゐる。パルピユスは眼が高い。そのあとにラデツクの最近歐洲の政界感想が附いてゐたが、甚だしく悲觀的だ。反動勢力がいかに有力であるかを物語つてゐる。共產黨員はいかに禪を固くしなければならぬかを激勵してゐる。

はならぬかを激勵してゐる。

——八月二十八日。

「改造」九月號に載つてゐるバートランド・ラッセル氏の「道德的標準と社會的幸福」には一々同感だ。今更ながら同氏の頭のよさには全く驚嘆する。勿論ボルセキキの人々から見たら一顧の價值もないかは知らぬが、又労働者諸君には直接何の感銘をも與へぬ議論かも知れないが、私のやうな立場にゐて、現代のやうな時世に生き、さうして文筆から離れる事の出来ぬ人間にとつては、實際これ以上の福音はないやうな氣までする。惜しい哉、原文がついてゐない爲、ラッセル氏自身の警咳に接するやうな思ひはし難いが……尤も原文もやはり若い妻君の筆記かも知れないけれど……

——八月二十九日。

毎日残暑がきびしい。大した事にはならぬが、三日ばかり引つゞき雷鳴がある。安
き心もない。

x

加藤首相が死んだんで、山本権兵衛がまた顔を出す。後藤新平が外務大臣になるんださうだ。どうなと勝手にするがいゝ。私自身の生存とはそんな事は何等のかゝはりがない。

——八月三十日。

「解放」の西村渚山君から依頼の、「文學を愛好する青年に」といふ題に對する原稿十枚、きのふからかゝつて、今書きをはり、すぐ出す。

x

上海の橋本君からの手紙、

「文明病患者」有難う御座いました。再讀しました。大變面白く感じました。小生の思想があなたにかぶれたのか、元々同じ様な思想が私の内にあつたものか、今となつては明瞭を缺きますけれど、共響を感じる點が多分にあります。それで人一倍お作にひきつけられるのかも知れませんが、ほとんど全部一度讀んだものですけれど、新たな感じで讀みました。

「御來遊なさるぬ由残念ですが致し方ありません。十月に御渡佛の途次御目にかゝる事を頼みにして居りませう。

「内地も暑い事と存じます。當地は此頃では、返つて内地より涼しいかも知れませんが。毎日テニスをやつて居ります。そして一杯のビールに暑さを忘れて居ります。何事も考へないやうにして居ります。考へる事はあまり淋しすぎます。抱いてゐた希望が百分の九十九迄到達し得られない事がわかつて、只一分の望を捨て切れずに、しかも現在では其望を否定しつゝ引づられて生きて行く生活を眞面目に考へたらやり切れ

ません。六ヶ敷い高尚な理想は別として、只の金もうけと云ふ事だけにすら、希望を殆んど失つて居る現在の生活が、つくづくいやになりながら、現在に即して安泰の中に安んじてゐる事を思ふ時、淋しくてく仕方がなくなりませす。幸からだゞけは人並に達者ですから、一層の事失業者になつて、労働者の群に入つて、とも、時に思ひますけれど、それも出来かねて、ズボラな毎日を消してをります。生きて來た事の不幸をつくづく感ずる様になりました。若いものばかりの社宅で、下らない世間話をしてゐる時や、會社に多忙で他の事を考へるひまのない時には、僅かに不安と不平と淋しさから解放されます。グーダラな會社員んで云ふ境遇に入つた事をつくづく後悔します。と云つてどの様な生活でも、今の世の中に私がほんとに満足して生きて行ける様な境遇もありさうありませんけれど。妹や友人等は私の淋しさを獨身に原因してゐると思つて、結婚をすゝめます。然し私は結婚によつて慰められる様な淋しさでない様に思へます。結婚なごすればます／＼淋しさは加重される様に思へます。それで結

婚する氣にもなれません。何事にもすぐあきやすい小生が、一人の女と結婚といふ形式のもとに同居するなんていやな事です。と云つて、やはり女がほしい事はほしいのですけれども、それも淋しさの全部ではありません。一部でもない様です。一口に云ふと、小生の現在が餘りに刺戟が少なすぎます。そして希望がなさすぎます。希望のない處が刺戟のない所以でもあるのでせう。此様に寄生虫みたいな生活をして淋しさや不満や不平を感じない男は語るに足らない鈍感者です。そして大抵のやつが鈍感です。「下らない事を書いてしまひました。此様な感じの下にいやな毎日を消してをります。苦痛もない、慰めもない生活を……云々」

橋本君は三十歳だ。丁度何人でも苦しみ出す時代だ。二十代のそれとは異つて、本當になまく／＼しい、どうにもならぬ、恐るべき人生そのもの、核心に觸れはじめたのだ。

Mi ritrovai per una selva oscura,

Che la diritta via era smarrita.....

ど、ダンテがうたひ出した、その「人生の半途に」さしかゝつたところなのだ。

——三十而立。と孔子は云つてゐるが、恐らくその「立」といふ字は大苦惱の矢面に立つといふ意味なのであらう。釋迦基督が悪魔どもの誘惑に試みられたと云ひ傳ふる年輩も、やはり三十だ。

今日となると、私はもう一度あの時分のやうに苦しんで見たいと思ふ。従つて橋本君が羨ましくもなる

x

文子、一ヶ月ぶりで東京へ出る。旅券の事や郵船へ手金を打ちに行く事を兼ね、旅行學院の決算の爲にだ。

——八月三十一日。

婦人公論の島中氏から質問してよこした事について答へようとして三四枚書きかけたが、思はしくないので破りすてる。

x

「無想庵雑誌」が来る。ひどく田舎くさい、ひどく舊式な、きたならしい雑誌だ。こんな雑誌を買ふ奴はある筈がない。どうせ物笑ひになるつもりでやり出したんだから、なんだつてかまふ事はないが、毎月これを二千部づゝしよひ込んで、しかもそれを一年以上意地づくで出しつゞける勇氣があるか、まア、堀岡君の御手並を拜見する事としよう。

x

誤植の多いのは甚だ不快だ。それから自分自身の思ひちがひなどを発見して、心苦しう思ふ事が多い。改造社では私の文章に六回くれていると思つてたところ、九月號の

七十二枚に對し、「金四百圓ノ内ヨリ左記ノ通御差引分、六月二日中根岸水島様方へ改造七月號御稿料金貳百參圓五拾錢ナリシヲ金貳百五拾圓也御渡シ、差額金四拾六圓五拾錢ノ前貸金トナツテ居リマシタ分デス」とあるところによると、なアんだ、一枚五圓五十錢だつたのだ。

——氣前よく二百五十圓くれたのかと思つてゐたら、前貸して置いてあつたわけか……と、ブツ／＼云ふと、

——五圓五十錢だつて結構ぢやないの……私なんぞは三圓五十錢しきや貰つてゐやしないぢやありませんか……と、女房がなだめてくれる

——それでも佐藤春夫は一枚八圓だつて云つたせ？ 佐藤の文章と俺のぢや一枚について二圓五十錢ちがふんだと見える。

——他人の事なんぞどうだつていゝぢやないの……

——ウン、そりやさうだがね……

どうも錢の事だとカドが立つ

x

讀賣新聞から十二圓の振替が来る。何も先月書いた覚えはないがと思ふ……と、下に無想庵愚談録としてある。多分、加藤謙君が書いたものに相違ないのだが、わざわざその談話料を送つてよこしてくれたものだ。金の事でかう思ひもよらぬものが這入ると、ひどく嬉しいものだ。私はどうも守錢奴らしい……

x

室伏高信君は、きのふ改造社で、私の女房に向ひ、

——あんなヂバイはもういゝ加減に見かぎつてやツちやどうですか？ といつたさうだ。あんなヂバイとは私の事だ。けしからん男だ。まるで有島武郎のやうな男だ。尤も一萬圓位ぢや私は決して手放さないつもりではあるけれど……

——九月一日。

ゆふべから車軸をながすといふ大雨。例の二百十日天候だ。地理學的に置かれた日本の地位を思ふ。一年のうち、落ちついた、シンミリした生活の出来得る月は、日本では、まづ十月の末から十一月の上旬迄ぐらいのものだらう。あとはいつでもザワザワした慌だしい心持をするやうに強ひられる氣節ばかりだ。私のやうな神経の所有者には非常に不適當な風土だと思ふ。一度外國へ出て見て、しみじみとさう感ずる。今度の再渡歐の原因には無論それがその一つとして加へられてゐる。

×

室伏氏に冷罵されるまでもなく、私はもうヂバイに相違ない。毎朝鏡を見て、一夜ごとに白髪がふるてゆくやうな氣がするほど、この頃は年をとつた。

×

山本權兵衛は併し七十二歳で總理大臣になる勇氣がある。私はまだ四十三だ。山本

よりは三十年も若い。五十にもならず屁古垂れては無法庵の名にそむく。

妻
の
生
死

妻の生死

ポツリと只一人、いつものとほり天下泰平に、黙々と午餐の卓に向ひ、やがてその第二椀に箸をつけようとする刹那、ツシンといふたゞならぬ、異様なる一大音響と共に、膝の下の畳がムクともちあがる。ハット跣先のまゝ、前後不覺に庭へ飛び出す。同時に瓦落瓦落と世にもすさまじい家鳴震動が、轟然と突發する。

デブ／＼に肥つたイセ公、耳の遠い松田さん、無我夢中でイヴオンヌをかゝへた久子女史、その三人の若い女の、眞蒼に顔色を失つた一團が、狂氣のやうに泣き聲をヒイ／＼と立てながら、傍の蜜柑の木のところまでとび出してゐた。と、本能的に私は久子女史の手からイヴオンヌを奪ひとる。

大地がだしぬけにユサ／＼と波打つ。イヴオンヌを抱いたまゝ、私は思はず横倒し

になる。カナメモチの四つ目垣と、幅一尺ばかりのちよいとした芝土手との、窪んだその間の、丁度小溝のやうになつたところへ、私はいつのまにか陥つてころがる。

——イーちゃんを……イーちゃんを……と、女達もころがりながら絶叫する。はじめ『地震だな』と思ふ。『こいつは容易ならん大地震なんだな』と思ふ。『さあどこへ逃げ出そう?』と思ふ。イヴオンヌはと見ると、呆れたやうに大きく目を睜つたまま、まばたきもせず、息を殺して、シツカリと私のからだへ御噛みついてゐる。『怪我でもさせては大變だ』と思ふ。

と目に見えぬ巨人の手で、グツト襟上でもひつつかまへられ、恰もグイ／＼と、やけに残酷に、無慈悲に小突きまはされる様に、トタン屋根が、小廂が、ぬれ縁が、桐の木が、桃の木が、蜜柑の木が、龜裂したところ邊の大地が、一齊に激動する。

四つ目垣の外は梅林だから、とりあへずその中へ避難しようかと思つたが、子供を抱いてゐるので、思ふやうにはとても垣をのり越せぬのと、それから、この梅林は、

なるほど樹こそ苔蒸して、それぞれ相應に皆古木ばかりだけれど、考へて見ると、何しろ、まだ、つひ、この四五ヶ月以前に、他所の山から爰の荒地へ移植したものにすぎないのだから、さう／＼深くは、また堅くは、それほど根の張つてゐさうな筈もないので、いつなんどきそれらの太い幹がバツタリ腦天へ倒れ落ちて來まいものでもない……と思ふ突差の瞬間に、梅林はやめにして、そのまゝ四つ目垣にそうて、ひろびろとした前の畠地の方へ、よろめき／＼遁れ出る。

二の宮驛のあたりから秦野街道へかけた、家並のたてこんだ空一面に、バツと代赭色の砂煙が熾の如く舞ひ上る。

大地は陥没しはせぬか?……海嘯は來はしないか?……海岸からわづかに三丁にたらぬほどの直徑地點にある畠の中だ。「かうしてはゐられぬ」と思ふ。が、どこへ逃れやうどこへ?……地質學上の昔噺にきく、かの土佐沖などに横つてゐる筈なる一帯の陸地が轉瞬して影も形もなく、海底深く沈み去つて了つたとかいふ、若しもそうした

科學神話或は傳説のやうな、有史以來いまだかつて人類の體驗せぬ、恰もこの世の終りであるところの、これが若しその戰慄すべき一大地震でもあつたとしたら？……觀念はしながらも、のがれ得られるかぎりは免れたいと思ふ。せめてイヴオンヌだけは助けたいと思ふ。さう思つて、四つ目垣にそうて走る。山の方へ、山の方へ、と念じつゝ走る。やはらかな畠の土を素足の底に感じながら走る。三人の女達も、泣き叫びく、私のあとから後れじと走る。

二

雑草の生えひろがつた荒蕪地へとび込む、松本醫院の門前から十間ばかりへだたつたところである。

と、ユラ／＼と大きな揺れ返しが来る。

——しやがんで、く／＼……動いてはあぶない……

——そこは大丈夫だから、そこを動かすに……

——その楯にシツカリつかまつて……さうすりや、地が裂けてもすこしも恐いことはない……

泥だらけの浴衣がけに、向ふ脛から血など流して、蒼白な顔色で、くづれた石垣を踏みこえながら、躍り出して来た老ドクトルが叫ぶ。私達はその言葉のとほりにして、雑草の中へしやがむ。それからそこらに抛り出されてゐる大きな楯の束へすがりつく。

電柱がガクと揉まれもまれる。電線がのびたり、ちぢんだり、たるんだりする。

ゆれ返しのたびごとに、

——こわい！……と脅かされてけたましくイヴオンヌが泣き出す。追々にとあつまつて来た近所の子供達も、同じやうに同時に泣きわめく。

——こわくない、こわくない……と、私はその都度、さう彼女の耳元へさゝやいては、ひしと彼女を抱きしめつゝなだめすかす。と昂奮しきつた三人の若い女も、膝で

無意識に雑草の上をいざりよつて来て、期せずして抱かれたイヴオンヌの三方からとりまいて守護する形勢をつくる。

だん／＼に人が集まる。あちらからも、こちらからも、續々と怪我人をおかついで来る。醫院の中からテーブルが持ち出される。薬品が運ばれる。必死となつた老ドクトルの應急手當がはじまる……顛顛と額との間が真紅に、まるで唇のやうにイミ割れた、十歳ばかりなる、人事不省の少女。した／＼か右の足首をば碎かれて素裸で、下帯一本のまゝ、老婆の背中から卸された、その連合なる、六十あまりの老人。草に絶つて苦痛をこらへる、何物にか腰を打たれて、その夫にかつがれて来て、腹這ひに俯伏した女。片頬を血だらけに染めて、手も足もだらりと、半身が不随になつた男。臂を折つた人、膝をくじいた人、その他さまざま／＼なところをさまざま／＼に怪我した人が、見る／＼私達の目の前に集つて来て、くひしばつたそれぞれの齒の間から、忍びきれぬ呻吟をばそれ／＼に洩らしながら、手當の順番のまはつて来るのを待ちかねる……

——臺所の火は大丈夫かい？ と、私は肥つたイセ公にきく。

——え、ホンの少うしばかりセリンの中に残つてるツきりなんですけれど……それに、その上には、たしか、おゆうのいッぱい這入つたおやかんが掛つてた筈ですから……

——まさか火事も出まい……

——あれんばかりのお火なら、きつとおゆうがひツくりかへつてもう、すぐ消えて了つたにちがひないと思ひますから、火事なんて……それや大丈夫でせう……といかにも大丈夫らしくイセ公が答へる。

小一丁ほど彼方に、まばらな梅林の梢を越して、二棟につらなつた私達の小家の、一向何等別條もなかつたらしく、ケロリ首を出すトタン屋根の外形が、平生のまゝに眺められる、かれこれ、もう、ものゝ一時間はたつぶりたつたが、いまだ一縷の煙さへ上らぬところを見ると、恐らくイセ公の判断ごほりであらう……

地面は執拗に、五分置き或は三分置き、その位の間隔で、ジシン、ユラ／＼、ツシン、ユラ／＼と動きつづけてやまないが、かの、すばらしい最初の二三回のやうな、あゝいふ世にも恐ろしい、身の毛のよだつ奴は、次第に時のたつに従つて、そのうちに襲来しさうな氣勢まで、いつとなくうすらいで来る。が、併しジシン、ユラユラといふたびには、さア今度こそは、今度こそはと、思はずツツとする。

三

通りすぎる出入りの或る職人にたのんで、家から一枚、雨戸をはづして来てもらう。かうなると、一瞬時も手離すことの出来ぬイヴオンヌをば、シツカリとかき抱いたまゝ、私はジツと戸棚の上に胡座をかく。眞夏のやうな熾烈な日光をばジリ／＼と脊筋のまツたゞなかへ、あびせかけられて、直射されて、焼きつけられて、その暑いこと、暑いこと……

渦卷いた羊毛でも根氣よく積み層ねたやうな、話にきくバベル塔か繪で見る須彌山の形をした、崇高に、しかし無氣味な、怪しく東北の碧空にそゞりたつた、生れてからまだ一度も経験した覚えのない、不可思議千萬の感じのする一大雲峰が目に入ると……この世の終りに出現する雲ぢやないかと思ふ。

と、二の宮の町の銀行や便郵局へ、さつき金を預けに行つて、いまだに還つて來ぬ娘は、どうしたらうと思ふ、けさ午前九時二十九分の東京行列車に乗つて、六月頃から申込んであつた歐洲航路榛名丸一九九號キャビンに對する保證金を拂ひ込みに、恰も横濱なる郵船支店へ赴いたまゝの妻の安否が、早鐘のやうに胸を衝いて、ムラ／＼と氣になり出す。

『若しや……………』

——奥さん、どうなすつたでせう？

——さア……

——きつと小杉に寄つてらッしやる時だつたと思ひますけれど……

——ウン、お婆さんか……

——え、もうお歸りになつてもいゝ頃ですけれど……

——さうサ……

——お迎へに行つて見ませう？

——まだ途中があぶないせ。

——でもひよつとして……

——さう、ぢやア、三人一緒に十分に氣をつけて、行つて見たまへ……と、云ひさす時

——ア、いらしつた！と三人の女は思はず狂喜の聲をあげる。梅林と地主の池田さんの納屋とその間の島の上へ、洋傘を持つた姑の姿が、ヒョッコリと現れる。

——こゝです、こゝです……こツち、こツち……と、三人は夢中になつて手をたゝき等し、一齊に大聲あげて、こちらの方には一向氣のつかぬ姑の注意を促す。と、す

ぐきゝつけて、姑はいそゝと近づく。

——小杉で挨拶して、敷居の外へ出やうとする時だつたので……二度ほど往來へ投げ出されて轉びました……五百子のことが心配で、……と、息をはづませる。

怯びえきつた女達も、姑が立戻つたので、いさゝか元氣を恢復したかして、或ひは急に各自の責任感を思ひ出したものか、勢ひよく立上つて、私とイヴオンヌとを戸板の上へ残したまゝ、前後不覺に逃げ出して來た家の中の様子を見にゆく。

氣がつくと、私達の家の筋向ふの、豪農の家の長屋門が、その古び切つた萱葺屋根をば、いびつに不等邊多角形に、はなはだ窮屈さうに、すこぶる變手古な恰好にまがりくねらせて、いつのまにか、ベツタリと、見事に倒壊して了つてゐた。つぶされた人や怪我人は誰もなかつたかしらんと思ふ。

三十分ほどすると、出かけて行つた四人の女達が、引續いて歸つて来る、姑はその中に預金證書や實印や證券などの這入つた私の妻のレチキユールを、久子女史は離れの八疊の私の机の上にあつた時計と眼鏡とを、それぞれ私に手渡しする。松田さんとイセ公とは飯櫃だの、梅干の壺だの、一升壺の麥湯だの、そんなやうなものを取あへず擔いで来る。イヴオンヌと私とを除いては、みんなまだ午飯前なのだ。握飯をこしらへながら、イセ公が語る。

——爰から見ちや何でもありませんけれど、家の中は滅茶々々です。箆筒は二タ棹とも、佛壇から、茶箆筒から、あの大きな臺所の戸棚まで、残らずツンのめつて、ぶつ倒れてゐて、まるつきり足も踏み入れられたものぢやありません……でもやうくの事で、これだけ持ち出しては來たのです……

と姑が引取つて、

——臺所から火事が出るところだつたさうです……

戸棚の倒れる拍子に、あの上にあつた石油ランプが、運わるくセリンの丁度眞上へ落ちたものと見えます……バツト火のあがるのをお隣りの方が見つけて、慌て、飛んで来て、幸ひ一杯あつたお風呂の水をかい出し大事にならぬうちに、すぐ消しとめて下さつたのです……あとで澤山お禮をして頂かなけりやならんと、お隣の方は云つておられました……

頭や手足やへ、くるくると眞白に縋帯をまかれた人々が、見る見るうちにその數を増して、この荒蕪地一帯の草原を蔽うて横はる。そこらに居る女達は、たれかれなしに縋帯卷の手傳などをはじめめる。顛顛を割られて人事不省に椽臺へ臥た、さつきの女の子はまだ正氣づかぬ。

——死んだんでせう。と、誰かが囁く。

と、眞向から前額を碎かれて物すごく出血したまゝ、生死不明に戸板の上へ仰向けにのせられ、大勢の人々に護られて運ばれた、いかにも大きな別荘の主人公でもあ

りさうな老紳士が、折から醫院の門前の、まるで廢墟のやうにくづれた石段の上へ到着する。薬品の臭氣がブン／＼と鼻を衝く。

——こゝは家から遠すぎて、何かにつけて不便でありますし……それに……このとほり、あまりに……と聲を低くして、眉をひそめ、——やはり、今のうちに引越したい方が、どうしてもよささうに思ひますが……と、姑が申しだす。
さっそく、その言のとほりにする。

イヴオンヌを抱へて、再び梅林のかごをまがる時、池田さんのところの、古い／＼瓦屋根の母屋が全くの文字どほり、ペチャンコにへし潰れてゐるのに、はじめて氣がつく。と、ついせんだつてのこと、大勢の職人達が、仕事師が、何となく江戸繁昌のその昔を偲ばすところの、悲しげにのどかな、苦しげに面白さうな、かの一種獨特の時代的地方的色彩と諧調とを有する、例の木やり唄など景氣よく張りあげたりして、まだナマナましい柱だけの林立した、建前をすましたばかりの小家が二軒あさま

しくツンのめつて、滅茶々に崩壊し去つて、そのガツクリとまろび落ちた瓦屋根だけが、恰も是龍田に在りとても洒落れたげな、さながら繪にかいた龍かなんどのやうに、線路手前の麥圃の中へ、ギクシヤクと、やゝ滑稽に這ひまはつてゐる、その姿にもはじめて氣がついた。

カナメモチの四つ目垣に近く、菜ツ葉か何かを蒔いてある筈なる、私達の家に屬する畠の一角へ、戸板を二三枚ならべて敷き、さうしてその上へもつて行つて莫塵だの、座布團だの、チャブ臺だの、蠅帳だの、何だのかだのと、恐る恐る家の中から運び出す。

五

蟬が啼く……と、いかにもノンキさうに、老莊哲學のやうに、鶏が時をつくる。で、その鶏小屋はと見ると、案外な無疵だ。ケロツとして、人を馬鹿にしたやうに、いつ、

どこで、そんな大地震なんぞがあつたのか、とでも訊きたげに……

が、例の薄氣味のわるい雲の峰は、その鶏小屋の真上にあたつて、依然として怪しげに、さつき松木醫院の前で見たのと寸分たがはぬかたちのまゝ、凝然として北東の高空にそゝり立つてゐる。

そこへ、東から西へ向つて、何萬何十萬といふ地上の人々の不安な視線をば、一齊に集めながら、飛行機が一臺まっしぐらに、ブーン、ブーンと唸りを立て、通る。

——小田原の御用邸で、閑院宮が御重傷遊ばしたので、宮内省からお差遣しになつた侍醫を乗せて今あの飛行機が通つたんださうです……と、どこから聞きかちつて来たか、スツカリ信じじきつた顔をして、イセ公が第一の流言蜚語を報告する。

日がくれかゝる。

家財道具が残らず潰された母屋の屋根の下敷となつて、まだその下からは鍋一つ取出し得ない状態にある池田さん一家と、今晚は共同で露營を張る事にさまる。

——かういふ時は少しでも人数の多い方が心丈夫です。と、姑が云ふ。

戸板の上に藁を敷き、その上に畳を敷き、四方に丸太を立て、トタン板を縛りつけ、足らぬところは箆を垂れさげ、見る／＼池田さんの手際で、畠の中へ持つて行つて、立派に八畳間が一つ出現して了ふ。

——雨さへ降らなきやア……えゝ、なアに、この分の模様なら、今晚のところではまづ、大丈夫降る氣遣ひはありません。と、案外にカラリと晴れた大空を仰ぎながら、池田さんは自信をもつて保證する。池田さんは地主だが二三代引續きこの土地の自作農だ。かつて日露の役へも出た事があり、かの二〇三高地で奮戦した尊い経験までもつてゐる。三人の子の父親で、しかもそのうちの一人は、ついこの一ヶ月ほど前に生れたばかりの、ホンの乳呑兒だ。で、その乳呑兒の着更や襦袢まで出せないので、池田さんの妻君の閉口し方は一ト通りではなかつた。

——五百子のがございますからこれでお間に合つたら、どうぞ遠慮なくおつかひ下

さいまし……と姑はイヴオンヌの古いチャンチャンコだの下着だの出して貸す。

——有難うムいます。と、池田さんの妻君はしきりと禮を述べる。

と、病的に慾の深い、生來の利己主義者たるイヴオンヌが、それを目早く見つける
と、震災とは關係なく

——イーチャンのだア……イーチャンのだア……イーチャンの貸しちやア、いけな
い……と、目にかご立て、意地わるくダッをこねる。

破壊もせず又にごりもせぬ井戸と云つては、この界限ではたゞ、松木醫院のそれ
と、朝鮮牛の牧場で牛に飲ませるために掘られた畠中のそれと、たゞその二つだけが
残る。日の暮れきらぬうちにと、人々は争つてそれらの井戸へ水を汲みにゆく。あら
ゆる青物、あらゆる罐詰、あらゆる食料、あらゆる日常の必要品をば、出来るだけ仕
入れに町へ出かける。

——なアに、今は薯が澤山ありますから、たゞのものには不自由しやしません。と、

池田さんがいふ。

——一週間分くらいなら、お米はまだ、内にも十分にあります。と、姑がいふ。

——なアに、米がなくなつたつて、薯があるうちは……薯さへありや、何も恐れる
ことはありませんよ。と、『命さへつなげたら』と、心中に泣き／＼私が云ふ。

六

ものほし棹を頭上で交錯して、それをば荒縄でく／＼り、その上に、私の書齋の八疊
で毎日見てゐた金巾の日よけを覆ふた、が、それだけでは、なか／＼夜露が十分に防
ぎさうもないので、更にその上へ、イセ公と久子女史とが駆け出して行つて、鹽見の
婆さんところから借りて來た、荷馬車にかける雨具をかさね、さうしてその丁度眞下
にあたるどころへイヴオンヌを……、お芋の煮ころがして夜食をすますと、もう、い
つのまにか、地震に對する恐怖などは忘れて、例の一トさかり、イラ／＼、チヨコマ

カと、そこら邊をかけずりまはつた後、きのふまでの家の中に於けると全く同様に、むづかつたり、泣いたり、大あくびしたりして、とう／＼落城して了つたイヴオンヌを寝かす。

紗の繪模様金魚の紅く遊んでる、蝙蝠傘をひらく要領でひろげられた、長方形の、鐘形の、さうして尙も夜露のかゝらぬ用心に、その上へそこにあり合せた竹すだれまでがかぶせた枕蚊帳と押並んで、その中でスヤ／＼と立てつゝある彼女の寢息の一呼吸毎に、疲れきつた神経をどがらしては寢耳をすましながら、肱枕と共に、ウト／＼と私は横になる、と、日よけの下に朦朧とブラさがつた小田原提燈の火が、どう考へて見てもそれが本物のやうに、現實の、五感の、決して夢でないこの世のものゝやうに、どうしてもどうも考へられぬ。考へられぬやうな心持ばかりがしきりにする。

が、ツシンと来る。ユラ／＼と脅かす。ハツと目がさめる。スワヤと用意する。本物だ。現實だ。この世のものだ。決して／＼夢ぢやない……提燈が、提燈の火にボン

ヤリ照らされた人々の寢姿が、人々——枕蚊帳を隔て、布團代りか、蚊に苦しめられた爲か、みんなで頭から蚊帳なんぞひツかぶつた、久子女史と、松田さんと、イセ公と、又蚊やり線香を目のさめるたびごとに六七本づゝ煙たいほごたいた私の枕元と相對して、小杉の竹坊、池田さんとの静ぢやんにみるさん、並んでおん大の池田さん、乳飲兒に乳房をくはへられたそのおかみさん、小杉のおばさん、それから姑、それだけの人々が、洒落でも冗談でもなく、本當に畠の土の上へ戸板を敷いて、戸板の上に疊を敷いて、疊の上にシットリと夜露にぬれそぼつた、不安と恐怖と困憊と不眠とに責めさいなまれつゝ、なま／＼しい五體を横へて居た。

妻はどうしたらうと思ふ。

東京も横濱も全滅ださうだ。妻はその全滅の横濱へ行つたのだ。死んだか知らん？……怪我したか知らん？……『全滅！……』が、誰がその『全滅』を見たのだ？……電話も電信も不通なんぢやないか？ 東京からも、横濱からも、誰一人まだ歸つて來たど

いふ話はないぢやないか？誰が『全滅』を見たのだ？……すべてが流言蜚語ぢやない？人々の勝手次第、人々の思ひく、人々の頭の機根に應じた、一番單純な、一番わかりやすい、さうして尤も多く根據のない論理的歸結ばかり急いだ、たゞもうセンセーショナルな事變の出現ばかり可能にした、たゞもう興味中心の道聽途説にすぎないのぢやないか？……丸ビルが倒壊して何萬といふ人が死んだ……山本首相が殺された……政友會本部が潰滅して、折から集會中だった高橋總裁はじめ、幹部の面々が残らず壓死した……皇居は炎上中で、攝政宮殿下が今蒙塵遊ばした……頭髪をのばした社會主義の首領達が、火焰の中に自動車を乗り廻して、放火しまはる部下を指揮してゐる。……今晚の十二時には非常に大きな揺れ返しが来る……その十二時もすぎた、無事にすぎた。

七

用をたしに露營の外へ出る。

月あかりで、あかるい。ばかりでなく、西の空も、東の空も、眞赤に焦げた雲の連續が、何とも云はれず物凄しい。西の空の下の大紅蓮は小田原に相違ない。東の空の下のそれは、平塚か、茅ヶ崎か大磯にしては遠すぎるが。いくら遠くても、横濱や東京の火は、まさかあゝまで空に映らぬであらう……秦野町も晝間から焼けつつけてゐるさうだ……

間として線路の上を、きのふまでは日に百回も汽車の通つた、向ふの土手の線路の上をば、フラ／＼と提燈が往つたり來たりしてゐる。蟋蟀がさかんに喃き立てる。

妻はどうしたらう……

——オオ、クレア、ド、ラ、リュウヌ、モナミ、ビエロオ……月が出ると、イヴオンヌを抱いて、きまつて、キツト嬉しさうに、さう唱へ出した可憐な妻の聲が、まざ／＼と耳の底にきこえて来る。

横濱の全滅?……本當?本當に全滅なのか?文字通りに全滅なのか?……倒れぬ家が、焼けぬ家が、絶對的に一軒もなく、生き残つた人間が、死なゝい人間が絶對的に一人もゐなかつたといふ意味か?……が、そんな馬鹿げきつた話はない。決して、決してない。そんな信すべからざる事が、なアに……なアに、有つてたまるものか?……が、あの刹那に、あの瞬間に、妻はどこにゐたらう?……午前の九時二十九分に二の宮を出たんだから、あの列車が横濱驛へ着いたのは、よしや二分や三分の差はあつても、十時四十九前後、即ち多少遅れたにしてからが、とにかく十一時までのうちだ。さうして地震が十一時五十分……さう、その間に約一時間の餘地がある……一時間……列車を出て、停車場の前まで行くのに、三分、五分……それから、電車? いや、海岸通りの郵船支店までは電車はきかないから、俵?……いや、時間が惜しいので、きつとタクシイへ乗つたらう、それに、二十分……いや、二十分はかゝらないかも知れないが、何だかだと暇どつて、要するに、十一時半までの間には、郵船へ着いて、

あの、いつもの二階の應接間で、きつと船客係の前田さんに會つてゐたに違ひない……例の、喋々とおしやべりして袋の中から正金宛の小切手を出すまでが、十分……と、それを前田さんが受取り、それに對する領收證を認め、そいつを妻の手に渡すまでが五分、いや七分、いや、やはり、相當の手續があるだらうから、十分位はかゝらう……すると、十一時五十分、地震だ……妻の事だから、一切抛り出して、すばしこく、機敏に、いちはやく戶外へとび出したに相違ない……が、何處から?……二階の窓からか　だとすると、パツタリ地上へ墜落して、足でも折つてゐるも知れぬ……或は階段を駆け下つて、玄關から出たか?　が、それまでの間にあの最初の、猛烈なる、ツシンと持ち上げられたはずみに、梁の石でも落ちて來て、そいつに頭でも碎かれはしなかつたか?……なアに、なアに、なアに……日頃から運のいゝ妻のことだ。そんな、そんな、へまな、忌しい破目になンぞ、大丈夫、決して、決して、決して陥る氣遣ひはない……ない。斷じてない。斷じて……